大谷大学真宗総合研究所

研究所報

No.53　　2008. 10. 1.

目次

真宗総合研究所の現在と改革の可能性　1
2008年度「指定研究」(辞退・補充・追加)研究組織一覧　2
2007年度「指定研究」研究経過報告　2
2007年度「一般研究」研究結果概要　10
海外学会参加報告　19
研究調査出張報告　23
彙報　25

真宗総合研究所の現在と改革の可能性

学監・文学部長　教授　大内　文雄

大谷大学真宗総合研究所は本学に付置される唯一の研究所、且つ真宗の名を冠する総合研究所として、1981年に発足した。以来、既に27年が経つ。

一昨年の2006年度には、開設25周年を記念しての二つの国際的シンポジウムが開催された。このことは記憶に新しい。それは本学の指定研究班の一つである「国際仏教研究」班による「南都仏教の中世的展開」と「宗教と近代合理精神―日仏文化の比較を通して―」であった。前者は英語班を中心として企画され、後者はドイツ・フランス班と本学の学術協定機関・フランス国立高等研究院との共同企画による。

一方、本年より３年後の2011年には、宗祖親鸞聖人の750回忌御遠忌を迎える。本学においてもそれを記念して特別指定研究「親鸞像の再構築」が進められている。また真宗大谷派の研究業務委託による指定研究「真宗本廟（東本願寺）造営史研究」も、御遠忌前年の2010年11月を目途として「真宗本廟（東本願寺）造営史料の研究ならびに『本願を受け継ぐ人々―真宗本廟（東本願寺）造営史―』の編纂」の完成が図られている。

本学の指定研究には、現在はこれらに加え、従来の「国際仏教研究」「西蔵文献研究」のほか、「大谷大学ＤＢ研究」と「大谷大学史資料室」がある。毎年５月の『研究所報』にその年度の研究組織一覧が掲載されており、これらを通覧すれば、課題名称もその時々に変化を続けてきていることが分かる。2008年度のそれぞれの研究課題名を挙げると、「国際仏教研究」は「諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の整理・収集・公開」の下に先ほどの英語班とドイツ・フランス班のほかに中国班があり、「西蔵文献研究」は「チベット語文献のデータベース化」、「大谷大学ＤＢ研究」は「大谷大学所蔵貴重資料のデジタル映像化」があり、「大谷大学史資料室」は「大学史関係資料の収集・整理」となっており、それぞれに研究と整理が進められて来ている。

このように眺めて見ると、研究所発足以来の真宗学事研究や大学史研究と言った研究はもとより、国際仏教研究や仏教文献研究もよく維持・継続されていると言い得るであろう。その反面、研究の方途や成果の対外発信、また外部環境の変化への対応等の点において、懸念されるところも現われている。

前者では、在籍学部学生への還元が挙げられる。この点では、既に『研究所報』48号にあるように、「大谷大学ＦＤ研究」班の研究成果が大学導入科目「学びの発見」実施の背景となったという好例がある（草野顕之「研究所と教育改革」）。大学導入科目自体は、今年度がその完成年度にあたり、慎重な検証が必要であるものの、このような好例を稀有の例にしない工夫が必要であろう。研究所が、教育と研究の両面をにない、大学院生を含む若手研究者の育成に寄与する使命を帯びるとしても、学部学生に向けての視点は持ち続けていかなければならない。来年度は、新学科として教育・心理学科が開設され、９学科を擁する学部が誕生する。短期大学部の２学科と合わせ、11学科のそれぞれの特質をどのように伝えるか、コース制を持つ持たないに拘わらず、学科としていかにまとまり得るか、それが本学の学科構成に関する議論の背景となるであろう。その点では、学科を単位とした研究計画があってもよい。

では後者はどうか。端的な例としては、「国際仏教研究」班が挙げられよう。ここが学術交流の中心として活動してきたことは、『研究所報』51号に述べられているとおりであろう（兵藤一夫「学術交流の拠点としての真宗総合研究所」）。しかしこの班が環境の変化に対応してきた結果、あたかも研究班の中に班が生まれるように、肥大化してきていることも事実である。このような傾向は「国際仏教研究」班に限らない。整合性をもってする改革が必要である。

研究所全体の改革は一朝になるものではない。しかし2011年までに終わるであろう研究計画のその後の計画策定を契機として、そのことを考えてみてもよい時期にきている。

2008(平成20)年度「指定研究」(辞退・補充・追加)研究組織一覧

■「指定研究」研究補助員の辞退(2008年8月31日付)

研究名	研究補助員名
国際仏教研究	研究補助員　福島　重(博士後期課程第3学年)

■「指定研究」研究補助員の補充(2008年9月1日付)

研究名	研究補助員名
国際仏教研究	研究補助員　王　奕明(博士後期課程第2学年)

■「指定研究」嘱託研究員の追加(2008年10月1日付)

研究名	嘱託研究員名
真宗本廟(東本願寺)造営史研究	嘱託研究員　櫻井敏雄(客員教授・建築史・意匠〔日本建築史〕)

2007(平成19)年度「指定研究」研究経過報告

大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念
特別指定研究

親鸞像の再構築

チーフ・教授　安冨信哉
(真宗学)

本研究は、2011年に迎える親鸞聖人750回御遠忌に向けて、過去50年間にわたる親鸞研究の動向を整理・検証し、これからの親鸞研究に新たな展望を開くことを目的として研究活動を行っている。「親鸞像の再構築」というテーマの下、以下の4つの研究課題を設けている。

a. 史的な親鸞像の再検討
b. 思想教学の検証
c. 現代における親鸞思想との出会い
d. 文献目録の作成

現代においてどのような親鸞像を描くことが出来るのかということが、本研究班の主要課題であるが、従来より「a. 史的な親鸞像の再検討」の研究課題を推進していくために、継続的に公開研究会を行ってきている。本年度はそれに加えて「b. 思想教学の検証」「c. 現代における親鸞思想との出会い」の研究推進も視野に入れて、3人の講師を招聘し、のべ4回の公開研究会を行った。以下、研究会の梗概を記すこととしたい。

1、公開研究会の梗概

・第七回公開研究会(2007/06/21、講師:本多弘之氏、題目:この時代に「本願を聞く」ということ—何を考えるべきか—)

本報告では、現代において親鸞の教えを主体的に、また持続的に学ぶということは、一体何を明らかにすることになるのかという問題に関して提言をされた。

まず、曇鸞が『浄土論註』において五難をあげたことに準えて、現代の五濁として科学文明、経済社会(資本主義)、マスメディア、都市化、世俗化ということをあげられ、それぞれについて問題点を指摘された。

そして、社会的問題に巻き込まれてしまっている現代の人々に本願の教えを語るための接木として、清水博氏の「場」という概念を取り上げられ、浄土を「場」という概念によって読み直していく可能性について語られた。また、排除の問題や、人間の理性を中心とする自力によって引き起こされる諸問題について、親鸞の教えに立って、どのように克服しうるかを考えていかなければならないという提言をされた。

・第八回公開研究会(2007/07/27、講師:草野顕之氏、題目:親鸞伝研究の諸問題)

前回の御遠忌（1961年）に出版された赤松俊秀の『親鸞』は、『親鸞伝絵』を骨格とした、厳密な史料批判に基づいた実証的研究として評価する事ができる。しかし一方で、親鸞の民衆性という面を十分に描ききれているとは言えない。本報告では赤松氏の研究を乗り越えるために、伝承史料を史料批判した上で用いる事で、史実として認定できるものを見出す方法を考える必要性が提議された。今後の親鸞伝研究において、「語られた親鸞像」を明らかにすることと共に、重要な研究視点を提示していただいた。

・第九回公開研究会（2007／10／10、講師：平雅行氏、題目：親鸞の越後配流と承元の奏状ー『教行信証』後序をめぐってー）

本報告では、密通事件を媒介とする思想弾圧であったとされる建永の法難から、越後での流罪中にかけての親鸞について、再検討がなされた。

『教行信証』後序は、赦免以前の承元五年に、岡崎中納言範光の取り次ぎにより朝廷へ提出された、いわゆる「承元の奏状」であるとする。また親鸞は流罪中、自らの預かり人となった在庁官人の三善為則の娘である恵信尼と結婚し、さらにはそれが奏状提出を可能にしたと結論づけた。

史料的制約の大きい当該期について、『教行信証』後序をはじめとする既存史料の見直し、あるいは中世社会における一般的な流罪制度とその変遷について事例を提示しながら検討するという、緻密な実証研究に基づいて、斬新な見解が示された。

・第十回公開研究会（2007／11／13、講師：本多弘之氏、題目：この時代に「本願を聞く」ということ—何を考えるべきか—）

本報告では親鸞像の再構築というテーマの下、二つの問題について提言をされた。

第一に、今日盛んに取り上げられる「スピリチュアリティ」という言葉を挙げて、その内容を仏教の視点から確かめていくことの必要性を述べられた。特に清沢満之の「生死以外に霊存する」という言葉をもとに「霊（霊性、霊存）」の問題を積極的に考えていくべきではないかとの提言をされた。

第二に、『教行信証』後序の「名之字」が何を指すかという問題を取り上げられた。「善信」は比叡山時代から通用していた房号であるとし、天親・曇鸞の思想を受けた二種回向の教学によって『教行信証』は成り立っていることなどを根拠に、「名之字」とは「親鸞」を指しているとの所見を述べられた。

質疑応答では第二の提言について、「善信」が房号であることの根拠、また『歎異抄』の「流罪以後愚禿釈親鸞令書給也」の解釈や、「七箇条制誡」の署名に関して議論が交わされた。

各研究会とも、親鸞研究を今後推進していく上で、貴重な視点を提示して頂いた。また参加した研究員や研究員以外の先生方から活発な質疑がなされ、多くの意見をいただくことが出来た。なお、これまで積み重ねてきた公開研究会の成果を、『シリーズ・親鸞像の再構築』として順次発刊していく予定である。本年度は発刊に向けての検討会を重ねて開催した。

2、文献目録の作成について

本研究班の研究課題の一つである「d. 文献目録の作成」は、前回の御遠忌以降の50年間（1961～2011）にわたる親鸞研究の各部門における研究史を回顧し、資料として活用できる文献目録を作成するというプロジェクトである。文献目録の作成方針とそのサンプルについては、すでに報告を行っているが（『真宗総合研究所紀要』第24号（2007年3月発行））、本年度も文献目録作成に向けてデータベースを構築するために、作業方針に則ってデータ入力を行った。本年度は特に『仏教書総目録』に基づいて、1983年、1984年分の日本語文献の単行本についての入力を終えた。

大学史研究

大学史関係資料の収集・公開・研究

チーフ・教授　織田顕祐
（仏教学）

【清沢満之研究に関する業務】

①『清沢満之全集』未収録文献の翻刻作業について

昨年度も引き続き、『清沢満之全集』未収録文献の翻刻作業を行い、欧文文献・フィルムの翻刻作業を完了した。これにより目標としていた、清沢満之の未公開の自筆資料の和洋混交資料の翻刻をすべて完了した。

②清沢満之『臘扇記』の出版企画への協力

清沢満之記念会による『臘扇記』出版企画（影印版『臘扇記』と注釈版『臘扇記』の出版）への協力として、本研究班が担当する『臘扇記　注釈』の出版準備作業を行った。当初は、昨年度中の刊行を予定としていたが、注釈の内容の増加、及び注や付録のさらなる充実化等、

編集作業上の事由により、昨年度中の刊行を実現することができなかった。当初の目標を達成できなかったことは大きな反省点である。できるだけ早期の刊行を目指し、作業を継続する。

2008年1月12、13日両日には、愛知県碧南市の西方寺、並びに清沢満之記念館において、西方寺本堂の調査と、西方寺所蔵の清沢満之・西方寺関係資料をもとに『臘扇記』に掲出される寺院・人物・地名・書籍・引用文出典・当該時期における西方寺境内の建物の配置等の調査を行った。また、併せて西方寺における仏事・報恩講の式次第等について聞き取り調査を行った。

【佐々木月樵研究に関する業務】

既に作成済みである文献目録を基礎として、佐々木月樵に関する文献の収集活動を継続して行った。

【大学史研究関係資史料保存に関する業務】

前年度からの継続作業として、当研究班の前進である真宗学事史研究・大学史編纂研究において収集された資史料の整理と保存に関する業務を進めた。昨年度は、①学寮・真宗大学・真宗大谷大学・新制大谷大学時代の史料9000点余り（ファイル冊数全239冊）の長期保存に向けた保管作業。②写真史料の保管作業の2つの作業を主に行った。

①の作業は、大学史研究所蔵史料として大学行政史料をはじめとする貴重な史料群（通称「黒ファイル」）の長期保存に向けたものである。前年度から引き続いて行っている作業として、錆等による史料の劣化の進行を止めるため、史料に付いているクリップやホッチキス、ピン、セロファンテープなどの留め具を取り除く作業を行っている。また、これらの史料群はクリアファイルに入れられた状態のまま保存されているため、中性紙封筒への移し替えを行っている。それと平行して、史料と既成のデータとの照合・再調査を行い、史料情報の充実を図っている。

昨年度末までに、黒ファイル239冊のうち127冊までの作業が終了した。来年度も引き続き中性紙封筒への移し替えと再調査を行っていく必要がある。

②の作業は、大学史研究が所蔵している写真史料の保管に関する業務である。この作業のうち、大型の写真史料に関しては、すでに175点の写真史料をデジタルカメラで撮影し、閲覧・公開の準備が整えることができた。

しかし、小型の写真史料に関しては未だに十分な処置が施されていないため、閲覧請求や公開にも迅速に対応できない状態である。来年度以降、早急に小型写真の整理・データベース化を行うことを課題としたい。

【近世学事・学寮史研究に関する業務】

本研究班の重要な研究課題として、近世における学事の進展に大きな役割を果たした「学寮」について、その実態と歴史的意義を考究することがある。

これに関して昨年度は、具体的な研究の課題を明らかにすることを目標とし、研究班全体において近世の学寮に関する勉強会を行い、『大谷派学事史』（『続真宗大系』第二十巻所収）の輪読を行った。本研究班において既に作成済みである『真宗学事史年表』を参考にしつつ、『大谷派学事史』を読み進め、学寮の歴史を紐解き、その実態と歴史的意義を尋ねることに努めた。昨年度中に、研究班全体における『大谷派学事史』の輪読を終え、班員それぞれが、『大谷派学事史』より具体的な課題を持ち、今後の研究課題を発表し合った。また2007年7月21日に、福岡県太宰府市観世音寺における資料調査を行った。

【他大学・研究機関との交流】

昨年度も、全国大学史資料協議会（西日本部会及び全国大会）主催の各種研究会に参加した。他大学の大学史資料室や博物館を見学し、また他大学の大学史担当者と大学史のあり方や、史資料の収集・保存、年史編纂事業などについて意見の交換を行った。昨今、自校史教育のあり方をめぐっては、いずれの大学においても重要な課題として認識されるに至っており、積極的な意見交換がなされてきている。学生のみならず教職員も含めた全学において自校史教育が徹底され確立されることは、当該校の建学の精神が常に再確認され、全学に浸透することであり、非常に大きな役割を持つ。昨年度も、本学においても傾聴すべき貴重な意見の交換がなされ、有意義な交流となった。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究動向の把握と資料の整理・収集・公開

チーフ・教授　宮下 晴輝
（仏教学）

本研究班は、仏教を中心とした海外の宗教研究に関する出版物の収集・整理を継続するとともに、国際学会への参加、海外研究機関との合同シンポジウムの企画・開

催、真宗・仏教関係の文献の翻訳などを通して、本学における仏教研究の成果を国際社会に発信する活動を続けている。本年度も英語班、ドイツ・フランス班・中国班の三班に分かれて研究を進めてきた。それぞれの研究経過の概要は以下の通りである。

〈英語班〉

通常の研究業務（研究所における海外仏教関係資料収集・整理・公開）に加え、本年度英語班は以下のような業務に取り組んだ。

1．国際学会参加に関して

（1）国際真宗学会大会

2007年8月3日（金）～5日（日）、カナダのカルガリー大学で開催された第13回国際真宗学会大会に当研究班を中心としたパネルを組んで参加した。木越康研究員、井上尚実研究員、マイケル・コンウェイ研究補助員に加えて、真宗学科の加来雄之准教授・一楽真准教授を招聘して準備を進め、"Transcending Dualism: Neither Monastic nor Secular as a Way through the Troubled World"（二項対立を超えて: 混迷する世界を渡る方途としての「非僧非俗」）と題して、教学的・歴史的観点から、親鸞の「非僧非俗」という表現に込められた思想の現代的意義を解明する発表をおこなった。会場の聴衆との質疑応答も約20分に渡り、活発な議論が交わされた。前回2005年に武蔵野大学で開催された大会に続いて今回も大谷大学パネルを設けることができたことは、国際真宗学会の学問的活性化に貢献する意味でも有意義であった。このパネルで発表された論文は2008年に発行される学会誌The Pure Land（New Series No. 24）にまとめて掲載されることになっている。次回の大会は2009年6月に龍谷大学で開催される。

（2）アメリカ宗教学会大会

11月17日（土）～20日（火）の4日間、米国カリフォルニア州サンディエゴ市で開催されたアメリカ宗教学会American Academy of Religionの2007年大会に井上尚実研究員が参加し、日本宗教部会のパネルNew Ways of Thinking about Shinbutsu Bunri（Differenciation of Kami and Buddhist Deities and Practices）in Japanにおいて"Shinbutsu Bunri as a Radical Disembedding of Local Religion: The Case of Ono Village in the Northern Ina"と題した研究発表を行ない、海外の仏教研究者と交流した。次回2008年の年次大会は11月にシカゴで開催される。AARの大会は、国際仏教学会（IABS）の大会とともに欧米の仏教学研究者が集まる重要な国際学会なので、研究動向の把握と交流のために、今後も英語班から代表を送ることを継続していく必要がある。

（3）ヨーロッパ日本研究協会国際会議

2008年9月20日（土）～23日（火）まで、南イタリアのレッチェ市サレント大学において第12回ヨーロッパ日本研究協会国際会議（International Conference of the European Association for Japanese Studies）が開催される。前回2007年のウィーン大会に続いて近代真宗に関する大谷大学パネル発表が認められたので、その準備を進めた。今回の宗教・思想史部会の全体テーマはReligion as Discourse: Performance and Performativity in Establishing and Contesting Authority（ディスコースとしての宗教：権威の確立と権威に対する異議申し立てにおけるパフォーマンスと遂行性）であり、英語班で検討を重ねた結果"Where Have All the Pure Lands Gone?: Challenging and Developing Doctrinal Authority in Modern Shin Buddhism"（浄土は何処へいったのか？：近代真宗における教学的権威への挑戦とその発展）というテーマで、近代教学における「浄土」理解の問題に焦点を当てた論文発表3本とそれへの応答からパネルを構成することになった。定期的に英語班研究会を開いて各発表の準備の進捗状況を確認し、内容について討議を重ねた。

2．近代教学の英訳論文集 An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings出版に関して

前年度に引き続き、ニューヨーク州立大学のMark Blum教授（当班嘱託研究員）をお招きして出版に向けた編集・校正の最終作業を進めた。年度末の春休みに研究所のフリースペースで集中的に作業を行ない、2008年度中にニューヨーク州立大学出版（SUNY）から出版できる目処がついた。今回、大谷派の近代教学を代表する清沢満之・曽我量深・金子大栄・安田理深の主な論文を集めた英訳が出版されるのに合わせて、海外の研究者を招いた記念シンポジウムを大谷大学で開催すべく、英語班としてその企画の検討に入った。

〈ドイツ・フランス班〉

1．2006年に行われた「大谷大学真宗総合研究所・フランス国立高等研究院（EPHE）合同シンポジウム：宗教と近代合理的精神――日仏文化の比較をとおして」をうけて、シンポジウムでの発表やコメントを編集して出版するべく、執筆編集作業を行った。

2．マールブルク大学神学部ディートリッヒ・コルシュ教授の著書『マルティン・ルター』の翻訳作業を進めている。翻訳終了次第、出版という形での公表を計画している。

3．EPHE（フランス国立高等研究院）-CNRS（フランス国立科学研究センター）において、ジャン・ポール・ヴィレーム教授（EPHE）と2009年5月合同シンポジウムについての打合せをした（井上尚実研究員：3月13日）。

シンポジウムのテーマの候補として、「ナショナル・アイデンティティと宗教」、「宗教の分野における公共政策」と「市民宗教の問題」、「異文化多国籍の人々の共存（グローバリゼーション）と政府の宗教政策」、「宗教と世俗化」が挙げられた。

打ち合わせを受けて、研究班においてテーマの決定をした。EPHE側が提示した幾つかのテーマの中から、発表者が自由に選択してテーマを決定することとするが、基本的に大谷大学側の発表は、日本社会（特に現代社会）における宗教という共通テーマを含むこととした。

〈中国班〉

中国華北地域（河北・河南・山西・山東各省）・東北地域（遼寧・吉林・黒竜江各省）・東部モンゴル（内モンゴル自治区東部）地域における宗教及び関連文化の諸相を、歴史資料による再構成及び現地調査によって明らかにするために、今年度は以下の研究活動を実施した。

1．大谷大学図書館所蔵　東本願寺旧蔵資料　海外布教関係部分の資料一覧作成

2005年度に開始した中国東北・東部モンゴル地域関連資料の一覧作成作業を今年度も継続し、中国華北関連の綴資料（仮番号19～25）の一覧作成作業を完了した。

また、これと関連して、下記の通りの公開研究会を開催した。

2007年7月24日（火）16:00～19:00　於：真宗総合研究所ミーティングルーム

・満洲引揚げ日本人布教者たちの六十年前の声
大谷大学　木場明志　教授

・『吉林省志』に記述される満洲国治下の仏教について
大谷大学　桂華淳祥　教授

・満洲国における東本願寺の開教活動の足跡
――書簡にみる開教地情報の伝達――
大谷大学真宗綜合研究所国際仏教研究班
山本琢　研究補助員

・20世紀前半期、東本願寺の中国華北地域における活動について
――昭和17年までの布教所設置地区の確認――
大谷大学大学院文学研究科博士後期課程　福島重

2．中国東北師範大学との共同研究　中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化　の推進

2007年8月25日（土）～8月31日（金），桂華・松川の研究員2名は中国の東部モンゴル地域（内モンゴル自治区シリンゴル盟正藍旗・多倫縣、赤峰市翁牛特旗、遼寧省阜新蒙古族自治縣、朝陽市、河北省承徳市）及び北京市において、モンゴル仏教・華北仏教についての調査を実施した。

2007年11月9日（金）～11月12日（月）、桂華・松川の研究員2名と木場明志本学教授は中国東北師範大学（長春）を訪問。副学長の張紹杰教授と面談し、共同研究の成果として、木場明志・程舒偉（編著）『日中両国の視点から語る植民地期満洲の宗教』が出版されたことを報告した。さらに、双方の研究員による研究交流会が開催され、最近の研究状況を報告しあい、今後の活動について打ち合わせを行った。

2008年3月16日～22日、程舒偉東北師範大学教授、智利疆東北師範大学講師を招聘し、桂華研究員、木場本学教授、浅見直一郎本学准教授、松川主事とともに本学にて研究活動を行い、下記の通りの公開研究会を開催した。

3月19日（水）15:30～18:00（於：響流館3階　マルチメディア演習室）

・民国時期華北地方の宗教の東北地方における伝播
東北師範大学歴史系　程舒偉　教授

・偽満洲国時期における国家祭祀の日本化
東北師範大学歴史系　智利疆　講師
通訳　本学　李　青　准教授

2008年3月27日（木）～31日（日）、桂華研究員、松川主事は中国の華北地域（山西省太原市内・太原市北郊・交城県・晋中市）において、華北仏教についての調査を実施した。

西蔵文献研究

チベット語文献のデータベース化

チーフ・教授　福田洋一
（仏教学）

本研究は、学内外のチベット語文献を調査・整理し、データベース化を進めることによって、チベット研究の基盤を構築し促進をはかることを目的としている。その

目的を達成するために、2007年度は、以下の課題に取り組んだ。

（1）大谷大学図書館所蔵チベット語文献のデータベース化

A. 北京版チベット大蔵経の研究

北京版チベット大蔵経所収のテキストに対する研究として、対象としたテキストは、世親造『縁起経釈（*rTen cing 'brel par 'byung ba dang po dang rnam par dbye ba bshad pa, Pratītyasamutpādavyākhyā*）』（Pek. 5496）である。本テキストは、世親の縁起観を表明しているものであり、彼の思想的変遷を知る上で極めて重要なものである。2007年度は、北京版にもとづきテキストを入力し、デルゲ版との校合をおこなった。

B. 蔵外チベット語文献の研究

この研究では、本学図書館、本研究班所蔵のチベット語文献の公開を目的とした電子テキスト化が中心となっている。2007年度は、本研究班所蔵のチベット語文献のうち、ツァンニョン・ヘールカ（gTsang smyon he ru ka Rus pa'i rgyan can, 1452－1507）『マルパ伝（*sGra bsgyur mar pa lo tsā'i rnam par thar pa mthong ba don yod*）』およびラ・イェシェー・センゲ（Rwa Ye shes sengge）『呪力自在者・尊者ラ翻訳師伝・広播妙鼓音（*mThu stobs dbang phyug rje btsun rwa lo tsā ba'i rnam par thar pa kun khyab snyan pa'i rnga sgra*）』の電子化をおこない、これをWeb上で公開した。また、すでに公開済みの『ミラレーパ伝』について、再度原本との厳密な校正をおこない、校正済みのデータを公開した。

（2）TLKのバージョン・アップ

Apple Worldwide Developers Conference 07参加のため、6月9日から20日まで嘱託研究員・野村正次郎をアメリカ・サンフランシスコに派遣した。氏は、開発作業に不可欠な情報の収集やApple社の開発担当者との打ち合わせ等にあたるとともに、嘱託研究員・ステーブ・ハートウエルとの開発作業をおこなった。こうして完成させられた「Kailasa」「Kokonor」という2種類のUnicode対応フォントおよびチベット語対応キーボード配列を含むチベット語システムは、Apple社に正式採用され、10月26日に世界同時発売されたApple社の新OS「Mac OS X 10.5 Leopard」に搭載された。詳細は『研究所報』No.52（pp.20－21）掲載の研究開発報告を参照されたい。

（3）公開研究会の開催

12月11日（火）には、インド・サルナートにあるチベット学中央高等研究所（Central Institute of Higher Tibetan Studies）の研究員ジャムパ・サムテン博士（Dr. Jampa Samten）を招き「インド文献のチベット語訳とその特徴」とのテーマのもと、2月12日（火）には、ロシア国サンクトペテルブルク国立大学（St. Petersburg State University）のウラジーミル・ウスペンスキー教授（Prof. Vladimir Uspenskiy）を招き、「ロシア所蔵北京版西蔵大蔵経について」とのテーマのもと、3月6日（木）には香港大学仏教学研究センター（The Center of Buddhist Studies of Hong Kong University）の客員教授A. A. テレンチョフ博士（Dr. Andrey Anatolyevich Terentyev）を招き、「ロシア・ブリヤートに現存する栴檀釈迦立像について」のテーマのもと、それぞれ公開研究会をおこなった。

（4）国際学会への参加

2007年7月17日から7月20日までの日程で、ドイツのハンブルグ大学にて、1st International Congress on Buddhist Women's Role in the Sangha: Bhikshuni Vinaya and Ordination Lineages（第1回僧伽における仏教徒女性の地位に関する国際会議：比丘尼律と受戒の系譜）が開催された。嘱託研究員・ダシュ・ショバ・ラニはこの会議に参加し、"Misinterpretations of the Buddhist Texts and the Problem of Ordination of Women（仏典の誤解と女性の受戒についての問題）"と題する発表をおこなった。詳細は『研究所報』No.51（pp.17－18）所載の海外学会参加報告を参照されたい。また、会議終了後は、ハイデルベルグ大学南アジア研究所（South Asia Institute, University of Heidelberg）を訪問し、同研究所でおこなわれている「オリッサ・プロジェクト（Orissa Project）」に従事する研究者との交流をはかり、同プロジェクトがカタログ化に取り組んでいる貝葉写本に関する情報を収集した。

（5）パーリ語文献研究

旧パーリ語文献研究が所蔵する貴重な東南アジア撰述パーリ語貝葉写本のデジタル資料の整理作業をおこなった。また、大谷大学所蔵パーリ語貝葉写本に関する国内外からの数多くの問い合わせに対する対応として、2007年10月4日、大谷大学所蔵パーリ語貝葉写本に関するMahachulalongkornrajavidyalaya Universityとの共同研究に関するミーティングをおこなった。2008年2月25日には、嘱託研究員・清水洋平が三重県菰野にあるParamita Museumにて当該文献の紹介をおこなった。

（6）オリッサ州立博物館所蔵貝葉文献の研究

9月に、研究員・小谷信千代と嘱託研究員・ダシュ・ショバ・ラニの2名がインド東部オリッサ州に出張した。当初はオリッサ州立博物館との共同研究契約締結のためであったが、条件が折り合わず、同州にあるSARASVATI貝葉写本研究所との間で、同研究所所蔵の約8000本にもおよぶ貝葉写本研究に関する共同研究の契約が結ばれた。この契約にもとづき、2008年1月20日（日）～2008年2月20日（水）までの間、当該写本に対するdescriptiveカタログ作成のため、ダシュ・ショバ・ラニが出張、調査にあたるとともに、今後の研究業務が円滑に進行するよう、現地研究者あるいは目録作成担当者に対する指導をおこなった。

（7）その他

寺本婉雅関係資料の調査

北京版チベット大蔵経をはじめとする本学図書館所蔵のチベット語文献を将来した（とされている）寺本婉雅氏関係の資料が、富山県南砥市城端にある宗林寺に所蔵されていることがわかり、嘱託研究員・清水洋平、研究補助員・松下俊英、同・太田蕗子および研究員・三宅伸一郎の4名が、2007年8月8日（水）～10日（木）の日程で宗林寺に出張、チベット語文献34点、パーリ語文献1点、直筆資料6点の整理・調査をおこない、保存措置をおこなった。

真宗本廟（東本願寺）造営史研究

真宗本廟(東本願寺)造営史料の研究ならびに『本願を受け継ぐ人びと－真宗本廟(東本願寺)造営史－』の編纂

チーフ・教授　木場 明志
（国史学）

「真宗本廟（東本願寺）造営史研究」は、2011年の宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌に向けて、真宗大谷派と本学との間で業務委託を締結して発足したプロジェクトであり、2006年8月以来、真宗綜合研究所に移管した東本願寺資料の調査・研究を継続している。なお、本プロジェクトは、2009年度までの4年間を調査・研究期間とする。

本研究においては、東本願寺資料を中心に本廟造営に関わる諸資料の調査・整理・研究を鋭意進め、本廟の造営再建の歴史を明らかにすると共に、『真宗本廟（東本願寺）造営史』（仮称）の編纂を行うことを目的とする。2007年度は、前年度に引き続き、両堂再建を中心とする真宗本廟造営に関する諸資料の精査・分類・翻刻、執筆用資料ファイルの作成を進めると共に、公開研究会・個別課題の研究報告会の成果をふまえて、『本願を受け継ぐ人々―真宗本廟（東本願寺）造営史―』の書名及び内容目次を確定し、各執筆者の選定と依頼を行って原稿執筆の段階に入った。以下、昨年度の具体的な研究活動と経過について、研究推進計画として掲げるⅠ．造営史の全体像の把握、Ⅱ．資料調査、Ⅲ．文書翻刻、Ⅳ．国内資料調査、Ⅴ．『真宗本廟（東本願寺）造営史』の目次作成、Ⅵ．研究会の各項目に基づきながら、順次に進捗状況を報告する。

まずⅠ．全体像の把握では、本山機関紙によって明治度造営進行過程史料を整理すると共に、その図表化から作事組織のあり方と変遷、担当部署における事業内容の把握が行われている。また江戸期造営に関しては、東本願寺資料から関連諸資料の抽出・写真撮影を行い、それぞれの再建ごとに分類・整理・分析を進めている。

Ⅱ．資料調査については、東本願寺資料の内、財務部所管の両堂再建資料に関しては、段ボール234箱（約6000点）中、1箱～23箱、200箱～234箱（一部を除く）の調査が終了し、残る24箱～199箱についても、抽出した関係資料の調査が終了している。なお上記資料群の中で、『献木上申書』『献木適用簿』については、データベース化及び統計・グラフ化が図られ、明治度造営おける献木状況や寄進の動向が把握されつつある。また諸国詰合、世話方、示談方の人名データベース化が進められており、在地から寄進される材木の動きと共に、献木を仲介した人々やその組織の実態についても分析が行われている。さらに、数多く伝来する絵図面類については、建築史的見地からの整理・分類も行われており、今までは明らかでなかった再建造営の諸相が漸次に解明されつつある。

Ⅲ．史料翻刻については、造営・焼失・再建の全般的な動向と、その具体的な様子を把握するために、東本願寺資料をはじめ、他機関所蔵の関係資料の全文翻刻または関連記事の抄出翻刻が順次に進められている。以下、翻刻を完了した諸資料の一部について、所蔵機関別に列挙すれば、次の通りである。

【東本願寺所蔵】

『天明・文政・明治御再建年月日調書』
「御影堂、本堂等建築に付日程覚」
『御影堂棟上記』
『東本願寺御堂御遷座之記』
『御再建日記』（3～6巻）

『御影堂雑録』（5、11号）
『公儀御裁許書留書』
『御寺内境土居之一件』
『拝領材木等一件』
【大谷大学図書館所蔵】
『再建につき御使僧演説の大意』
『天明八申年御類焼後御前通惣御門両脇石垣一件』
『東本願寺焼失ニ付心得之事』
『本山回録塗聴記』
『東本願寺御堂御再建御書写』
『万延元年仮御堂御遷座并供養』
『天明元治御類焼之記』
【国立国会図書館所蔵】
『東本願寺炎上記』
「豊臣秀吉朱印状」
【新潟木揚場所蔵】
『百事日誌』（第4～6）
【城端別院善徳寺所蔵】
『御再建見聞私記』

この他に、東京大学史料編纂所に所蔵される大谷派本願寺文書・妙安寺文書・本願寺文書の影写資料についても、それぞれ関連する箇所の翻刻を終了している。

Ⅳ．国内資料調査では、5月3日に富山県南砺市において真宗大谷派城端別院善徳寺の再建関係史料調査、翌4日には、同福光・刀利地区おける献木史料と聞き取り調査、および高岡市伏木の真宗大谷派法輪寺における献木用材記録の調査を実施した（詳細については、「2007年度第1回真宗本廟（東本願寺）造営史に関わる史料調査並びに聴き取り調査報告」『研究所報』№51を参照）。また8月9日～10日には、東京大学史料編纂所・国立公文書館内閣文庫・東京都立中央図書館木子文庫において、再建造営に関わる諸資料の閲覧と調査を行った。こうした国内資料調査は、本山から移管した東本願寺資料の補助調査と言うだけでなく、むしろ地域の末寺・門徒の助力と信仰の様相を窺い知るための資料の発掘調査であり、国内資料調査を通じて、造営史全容のさらなる理解に努めている。

Ⅴ．『真宗本廟（東本願寺）造営史』（仮称）の目次作成については、本プロジェクトの研究成果が具体的に明示されるものであり、研究推進計画の各項目が有機的に結合する中で見極められなければならない。そこで昨年度来の調査・研究をふまえ、12月11日の第7回全体会議において、刊行物の書名を『本願を受け継ぐ人びと―真宗本廟（東本願寺）造営史―』（本編・資料編）と確定し、現時点における細目目次を決定して、合わせて執筆者を選定した。但し、目次については、具体的な資料の解読や分析、執筆状況の中で、種々の変更が予想される。また書名の確定と目次の決定、執筆者の選定を受けて、2008年2月15日の第8回全体会議において編集委員会を発足し、同月29日に各執筆者に執筆依頼状を送付した。

Ⅵ．研究会については、公開研究会と個別課題の報告会を定期的に実施してきた。公開研究会は、嘱託研究員を中心に4回開催したが、多数の貴重なご意見を頂戴することができた。

第5回目：山岸常人氏
（講題「建築指図史料への視点」）
第6回目：川端泰幸氏
（講題「東本願寺再建の根拠―東西分派伝記・宗主消息を読み直す―」）
第7回目：登谷伸宏氏
（講題「仮両堂の建築について」）
第8回目：江上琢成氏
（講題「明治造営開始期の精神史」）

また個別課題の報告会では、再建造営をめぐる諸問題が、順次に取り上げられると共に、刊行物の全体構成・章立て・目次内容についての検討が行われた。

最後に、来年度以降の研究計画を示せば次の通りである。2008年度は、『本願を受け継ぐ人びと―真宗本廟（東本願寺）造営史―』の執筆・編集体制へと移行すると共に、関連諸資料の調査・研究を継続し、各執筆者から要望に応じていく。また「執筆者会議並びに事務連絡会議」と「編集委員会議並びに公開研究会」を開催し、原稿執筆・編纂作業を鋭意に進める予定である。

2007(平成19)年度「一般研究」研究結果概要

共同研究

仏教と教育の関係性に関する哲学的・臨床的研究
—「心の教育」の所在を探る—

研究代表者・教授　皇　紀夫
（臨床教育学）

私たちは、平成18年～19年度の科研基盤研究（C）（課題番号18530631）及び真宗総合研究所「一般研究」として上記テーマに取り組み、平成20年３月に報告書を作成した。本研究の目的と研究方法に関しては、本研究所『研究所報 No.51』（2007年10月）に記載した立場を基本にして、そこからの分節的展開と修整を試み、本研究が掲げた大きな課題に対するある種独特な接近を工夫することができたと考えている。研究内容の概要は、今回作成した研究報告書の目次を紹介することをもってそれに替えることにしたい。研究の詳細については、研究報告書をご覧頂きたい。

はじめに——研究テーマに関しての予備的説明
Ⅰ　調査研究の部
第１章　資料の“見立て”に関する説明
第２章　仏教系大学の概要
—大学規模と仏教教育の傾向—
①巨大規模大学（収容定員１万以上）
②大規模大学（収容定員１万以下４千以上）
③収容定員４千以下１千以上
④収容定員１千以下
第３章　仏教教育言説の分析（臨床教育学的試み）
①考察の立場
②仏教（教育）言説の仕組みの考察
③（仏教）教育言説の仕組みの考察
（以上執筆者　皇　紀夫）

第４章　仏教系私立大学における宗教的科目と宗教行事
①はじめに
②総定員１万人前後の大学
③総定員５千人～３千人前後の大学
④総定員２千人前後の大学
⑤総定員千人以下の大学
⑥おわりに
（執筆者　関口　敏美）

第５章　キャンパス空間の多義性
—空間演出技法の臨床教育学的分析—
①「テクスト」としての大学キャンパス
②大学キャンパスと建造物の配置
③空間演出としてのシンボル
（執筆者　大野　僚）

第６章　幼児教育の教育課程にあらわれる仏教性
①はじめに——資料の説明
②園の教育（保育）方針・保育目標・園の目標にあらわれる仏教性
③領域・内容にあらわれる仏教性
④保護者や保育者への呼びかけとしての仏教性
⑤おわりに
（執筆者　山内　清郎）

Ⅱ　理論研究の部
第７章　死の学び
1　葬送儀礼と子ども
1.1　隠される「死」
1.2　身体から離れる死
1.3　釈迦に倣いて
2　葬送儀礼の現代における意義
2.1　葬送する人間
2.2　葬送と自己責任論
3　個性と「掛け替えのなさ」
（執筆者　門脇　健）

Ⅲ　資料編

共同研究

新発見の安慧『倶舎論実義疏』梵文写本の研究

研究代表者・教授　小谷 信千代
(仏教学)

スティラマティ（安慧）の『倶舎論実義疏』は、最も重要な『倶舎論』注釈書のひとつである。インドで著された『倶舎論』注釈書のなかでも、最も大部で詳細な内容を持つ。漢語断片や古代ウイグル文断片は存在するものの、サンスクリット原典は散逸し、これまではその存在を確認するに至らず、チベット語訳あるいはチベット語からのモンゴル語訳でしかその全文をみることができなかった。ところが、サンスクリット写本の存在が近年確認され参照可能となった。チベット語訳は、そのコロフォンに記される通り不十分な翻訳であることも多いに影響してか部分的な研究に留まっており、全体の本格的な解読研究は今後の課題であった。また、モンゴル文『倶舎論実義疏』に関する本格的な研究は今日までほとんど手つかずの状態である。近頃、北京版モンゴル大蔵経の論部の影印版が内蒙古人民出版社から出版されはじめた。これを契機にモンゴル仏典研究の進展も期待される。

いずれにしても、近年チベットのラサで保管されてきた膨大なサンスクリット写本の存在が確認されたことは、仏教研究者に大きな衝撃を与えてきた。いかにしてラサに残された仏教写本の膨大なコレクションが今日我々の前に姿をあらわしはじめたのかは、Ernst Steinkelner博士の報告 *A Tale of Leaves: On Sanskrit Manuscripts in Tibet, their Past and their Future* (Royal Netherland Academy of Arts and Sciences, Amsterdam, 2004.) に詳しく述べられている。すでに1983年9月から1985年7月にかけてLuo Zhao氏によってチベットで写本カタログが作成されていた。このカタログの記載に基づき『倶舎論実義疏』が現存することをErnst Steinkelner博士をはじめとするウィーンの研究者たちが確認してきたことにより研究の扉が開かれたと言ってよい。そして、ウィーンのオーストリア・アカデミーの研究所 (Institute for the Cultural and Intellectual History of Asia, Austrian Academy of Sciences) と北京の中国蔵学研究中心 (China Tibetology Research Center) との協力により、2006年の春から本研究所において『倶舎論実義疏』サンスクリット写本の解読研究をスタートさせることが可能となった。

本研究は、こうして参照可能となった『倶舎論実義疏』サンスクリット写本の解読研究に取り組んできた。第1章「界品」の「アビダルマとは何か」について解説し始める第2偈の注釈箇所から読み始め、現在は第7偈「有為法とその同義語」の注釈箇所を解読中である。

チベット語訳が、参照すべき重要な資料であることは言うまでもないことであるが、必ずしもサンスクリット文と一致するわけではなく、解読し難い箇所も多い。例えば、チベット語訳には割注のような形式で記述される箇所がいくつもある。サンスクリット文が小さなチベット文字で音写され、その下におそらく暫定的な訳と言ってよいであろう対応チベット文が添えられている。チベット語訳のコロフォンについては、江島惠教「スティラマティの『倶舎論』註とその周辺—三世実有説をめぐって」（『仏教学』19, 1986年.）の報告があり、チベット語訳のこのような問題点は『倶舎論』注釈書研究者のあいだではよく知られていることである。サンスクリット写本によって、それら難解な箇所の解読が期待されたが、現在のところそれらの箇所は、サンスクリット写本を参照しても理解不可能な場合が多々ある。今後さらに参照可能な限りの文献を参考に慎重に検討する予定である。

また『倶舎論実義疏』はサンガバドラの『順正理論』における議論の展開をかなり意識して注釈をしていることがあらためて確認される。ときに『順正理論』を直接引用し、あるいは『順正理論』を引用しているのかパラフレイズしているのか判断し難い箇所もあるが、いずれにしても、スティラマティは、非常に複雑な『順正理論』の文脈を熟知して、その内容を意識しながら『倶舎論』を注釈していることがサンスクリット文からも確認することができる。『倶舎論実義疏』という注釈書が持つ最大の特徴であると言ってよいであろう。

今後は、引き続き『倶舎論実義疏』第1章の解読研究を継続し、Diplomatic EditionならびにCritical Edition、そして試訳ノートを作成する。可能な限りはやく学界に研究成果を公表することができるよう、さらに準備を進める予定である。

共同研究

本願所寺院組織の確立と信仰文化の形成・伝播に関する歴史民俗学的研究

研究代表者・教授　豊島　修
（国史学）

本研究が対象とする「本願」・「本願所」とは、主に寺社の堂社修復の役を担い、その修復料としての米銭の喜捨をもとめて諸国を廻国・勧進し、当該寺社の縁起や霊験を唱導した宗教者、またはこうした宗教者を統括する組織である。「本願」は寺社の堂社修復等の成就という結果のみならず、その過程において信仰文化を各地へ伝播・定着させることとなった。その典型的で大規模な事例は、紀州熊野三山の「本願所」の事例である（『熊野本願所史料』）。

「本願」は、史料的に16世紀初め頃より全国の寺社に出現し活躍したことが知られる一方、17世紀になると社家や寺家との争論が頻発し、職掌や役割が制限されたり、追放されたりした。本研究では、まず「本願」の歴史的実態を究明すること、特定の寺社史における組織的解明にとどまらず、中世後期～近世の歴史学的諸問題の検討にも寄与できる研究成果を目指して活動を進めている。

「本願」のイメージは、熊野三山と山城国東山清水寺の「本願」の事例をもってよく知られている。熊野三山「本願」は、修験道を兼帯していたことが知られ、その成立段階から修験道との関わりが深い存在であった。また、少なくとも17世紀中頃以前、熊野「本願所」に属した熊野山伏や比丘尼たちは、熊野三山や新宮神倉山などの聖地に登山して修行を行い、「本願所」から「熊野願職」（勧進職）を免許された。彼らは諸国に赴いては熊野牛玉札などの配札や「老いの坂図」と「地獄絵」を上下に配した構図で特徴的な絵画類を使用して絵解きを行うという勧進行為を展開したことが知られている。熊野の「本願」は極めて組織的であり、その勧進スタイルにおいても「絵解き」という手法によって庶民レベルにまで広く熊野信仰を唱導した。すなわち「本願所」は、単なる寺社の堂塔修復のための募財を集積する組織ではなく、信仰の流布に深く関わる組織であったといえよう。しかし、寺社によっては必ずしも「本願」が出現しなかったり、「本願所」という組織が成り立っていなかったりする事例が確認され、熊野三山「本願」の研究成果による定義が当てはまらない事例もいくつか確認されているので、さらに事例の収集と詳細検討が必要である。

そこで本研究は２年間の継続研究として採択され、現時点も研究目的に則した活動を進めており、以上に述べた「本願」・「本願所」をめぐる諸問題についてその解明に取り組んでいることである。

2007年度の活動は、特に厳島社（安芸・大願寺）や多賀社（近江・不動院）、善光寺（信濃・大本願）などの「本願」について研究が進んだ。また、近江飯道山史料の調査・検討、十穀聖や「本願」が朝廷や武家の棟梁などをはじめとする公権力から保護されるという実態、たとえば「本願上人号」宣下の史料的事例研究、そしてさらに諸国の「本願」史料の収集などによって、「本願」をめぐる事例が多数得られ、その成果は着実に上がっているということができる。

しかしその一方で、「本願」の諸相は実に多様で、「本願」の概念自体が問題であるという根本的な議論の必要性が露呈した。すなわち寺社の一山組織による構造的な問題、地域性、時代性、系譜（法脈）、職掌など、「本願」・「本願所」の事例は、決して史料的に一律ではないことが確認せられた。つまり「本願」の呼称とその機能などについて、熊野「本願」・「本願所」の事例との異同だけではなく、さらに複雑多岐で難解な課題を新たに見出すことになった。

とはいえ、以上の点は、言うまでもなく研究の進展によって見出されてきた課題であるという意味では、本研究にとって大きな成果の一つとして挙げることができよう。残念ながら年限内で消化できる問題ではないが、鋭意、本研究会が主催する公開研究会などの場において議論を積み重ねている。すなわち、各地の「本願」の事例に終始するのではなく、「本願」に関わる時代性と宗教性についてさしあたり仮説的に研究を進める必要上、考慮すべき関連文献の領域を広げて、考察の幅を広げている。

本研究課題は、歴史学・民俗学などの研究領域に寄与できる重要な論点をいくつも含んでいる。その意味で、研究の成果は広く学界に問わねばならない。本年度で満了を迎えるが、引き続き「本願」研究を進める手続きをとりつつ、３月には、「本願」の所在とそれらの史料的検討に加え、その歴史的・民俗的意義、さらに新たに見出された課題などをまとめた報告書の発行を目指している。

共同研究

東南アジアにおける生成的コミュニティ

研究代表者・教授　田辺繁治
(社会人類学)

本研究は、多様で多角的な志向性と組織形態、新しい共同性と社会性をもつ集団、アソシエーション、ネットワークなどに注目しながら、それらが人びとの欲望、想像力や潜勢力によって生成変化していく局面を明らかにすることを目的としている。2007年度はとくに、生と生存のニーズに基盤をおく新たなコミュニティや運動に注目しながら、それらの実態を明らかにするための調査をタイ、ラオス、カンボジアおよび日本国内において実施した。

田辺繁治は、タイのチェンマイ県、チェンラーイ県のＨＩＶ／エイズ感染者ネットワーク、およびチェンラーイ県の２箇所の郡レベルの病院にて聴き取り調査を行った。それによって2002年頃から急速に普及したＡＲＶ(抗レトロウイルス剤)治療によって自助グループやネットワークの活動や役割が大きく変化していることが明らかになった。古谷伸子は田辺繁治との連携によって、タイ北部における民間治療師の治療実践とそのネットワークに関する実態調査を実施するとともに、タイにおける外国企業による生薬の商品化についての資料収集を行った。

松田素二は、タイ北部のチェンマイ県チェンダオ郡・メーワン郡のコミュニティ・フォレスト運動を調査し、「コミュニティの再想像」という観点からその展開過程に関するデータを収集することができた。高井康弘は、タイ東北部のノーンカーイ県、およびラオスのビエンチャン市においてベトナム系コミュニティの移住歴・アイデンティティに関する調査を行った。藤田直子は、タイの東北部ローイエット県の農村から移動し中部のアユタヤ県の工業団地で働く工場労働者から聴き取りを行い、彼（女）らのコミュニティ内部における新たな社会関係の形成、および故郷農村コミュニティとの関係の変化についてのデータを収集した。

阿部利洋はカンボジアにおける紛争後の社会再統合についての社会学的研究を進めてきた。2007年度にはカンボジアのクメール・ルージュ特別法廷をめぐる諸活動のなかで、各地の住民がいかにして法廷の進行に関与していくのか、という観点から参与観察を行った。カンボジア紛争後の難民については、堀井　愛が阿部利洋との連携によって、日本国内のカンボジア人難民コミュニティの再建活動について、神奈川県相模原市を中心に聴き取り調査を行った。とくに、悲惨な体験を経て難民として生き抜くことに専心した第一世代とはちがう、日本での生を楽しむ第二世代に焦点をあてながら、彼らのあいだにおける若者文化の形成について調査を実施した。

またインドネシア・中部ジャワにおける上演芸能を研究している矢野博之は、ガムラン演奏とジャティラン芸能におけるコミュニティ（上演者と参加者）の共有感覚の発生について論じるとともに、それをいかに東南アジア大陸部の上演芸能コミュニティの研究へと展開するかについて準備作業を行った。

各人の調査対象は、いずれもグローバル化する資本主義の展開のなかで生じた新たな社会関係と結合の有り様を反映するものとなっている。それらの研究成果をつき合わせる過程では、共通する課題が当時者の生存とニーズであることを具体的データに沿って突きあわせ、次年度の研究の方向性が「外部機関等との連携、葛藤、交渉」、「コミュニティの生成的な局面の明確化」となることを確認した。

また、「生成変化」および「コミュニティ」の概念に関する理論的認識を共有・深化させるため、2007年７月14日に２名の話題提供者を大谷大学に招聘して研究会を開催し、以下のような発表が行われた。

・小田　亮（成城大学文学部）「共同体概念の脱構築と再構築」
・箭内　匡（東京大学大学院）「他者になる、世界になる—生成的コミュニティ論のための一考察」

研究代表者および研究員らによる当該年度の調査結果を踏まえて刊行された著書・論文は以下の通りである。

田辺繁治「生政治とコミュニティ—タイにおける保健医療の変貌」『大谷学報』87巻２号、2008年、1−23頁。

田辺繁治『ケアのコミュニティ—北タイのエイズ自助グループが切り開くもの』岩波書店、2008年、215頁。

Tanabe, Shigeharu Chumchon kap kan pokkhrong chiwayan: klum phu tit chuea et ai wi phak nuea khong thai（コミュニティと統治性—北タイのＨＩＶ感染者グループ）, Bangkok: Sirindhon Anthropology Centre, 2008, 215pp.　（タイ語）

松田素二「共同体の再想像に向けて—アジア・アフリカの事例から」『哲学研究』585号、2008年、1−37頁。

阿部利洋「カンボジア特別法廷の社会的機能—あいまいな「正義」は何をもたらすか」『大谷学報』87巻2号、2008年、30－49頁。
矢野博之「中部ジャワの上演芸能における音楽に関する考察」『哲学論集』54号、2008年、94－101頁。

共同研究

聴覚障害者への地域生活支援のためのプログラム研究

研究代表者・准教授　志藤 修史
（社会福祉学）

本研究は2007年～2008年の２年間にわたる継続研究である。したがって、この報告は中間的なものであり、今後の内容の検討を深める予定のものである。

2007年度は、京都市内における聴覚障害児・者福祉のあり方を検討する上で必要不可欠な基礎的資料を得ることを目的に、聴覚障害児・者とその家族の生活実態調査を中心に取り組んだ。この調査は、聴覚障害児・者とその家族との信頼関係および手話通訳者、要約筆記者の協力なしには実施できないものであり、社会福祉法人京都聴覚障害者福祉協会に設置された「聴覚言語障害児・者の生活ニーズに関する実態調査委員会」を主体として実施した。ご協力いただいた手話通訳者や要約筆記者の方々、これら専門家集団の組織化にご尽力いただいた京都市聴覚言語障害者センターのスタッフの方に改めて感謝申し上げたい。

【調査の対象・方法】

調査は、京都市に在住し、身体障害者手帳を所持する聴覚障害児・者、並びに京都市聴覚言語障害センターで聴力検査を受けた者のうち、身体障害者手帳非該当の中・軽度聴覚障害者、さらに、京都市児童相談所内のろう難聴児の教室に通う児童の世帯、市内小中あわせて３カ所の難聴学級、特殊支援学校と難聴学級を持つ高校に通学する生徒とその世帯からのサンプリングを行った。結果、648世帯（障害のある方の実人数871人）から回収した。なお、このうち集計可能（有効）な数は645世帯であった。

本調査では、郵送によるアンケート方式や留め置き法によらず、実際に調査員が訪問し直接の対話を通じてくらしの実態と課題をとらえる訪問調査の方法により進めた。生活問題に関する調査は、相手が調査目的を理解し協力を得られることが不可欠である。聴覚障害児・者とその家族にとって、郵送によるアンケート方式や留め置き法では調査目的や質問項目の意図が伝わりにくい、回答が部分的なものにとどまる危険性が非常に高い、期待する回収も望めないとの予測から訪問調査の方法を採用した。

【調査の実施体制】

訪問聞き取り調査においては、一定の理論学習と訓練を積んだ調査員の集団的なまとまりが重要である。今回の調査では、訪問聞き取りにあたって手話通訳や要約筆記などが必要であり、かつ長時間に及ぶ可能性もあることから、基本的には複数で訪問しなければならず調査員の確保が大きな課題であった。京都市聴覚言語障害者センターの事務局職員との作業会議（11回）をはじめ京都市聴覚言語障害センター職員全体での学習会（４回）、調査委員・訪問調査員の学習会（７回）、地域・団体ごとの学習会（11回）などの事前学習会を開催することによって、手話通訳者、要約筆記者、聴覚障害者関係団体のメンバーからなる100名の調査員と、聴覚障害者の団体や機関、学校などの代表からなる68人の調査の委員会組織により体制を組むことができた。

実際の調査期間は2007年９月14日～11月10日の約２ヶ月間である。基本的な調査結果は、『聴覚言語障害児・者とその家族の生活実態調査事業』報告書（A４版、180頁）として、2008年３月に発行している。また、2008年３月７日、本学講堂において結果報告のためのシンポジウムを開催した。

【調査結果の特徴】

今回の調査結果から明らかになった基本的な特徴は以下の通りである。

第一の特徴は、聴覚障害児者と家族のくらしの基盤が不安定なことである。世帯の生活条件を規定している生計中心者の就業の有無と雇用・労働条件を指標にして階層構成をみると、回答世帯全体の約半数（46%）が「無業者層」であった。そのうち約４割は厚生年金・共済年金の受給者であり、「働いている方が誰もいない」という世帯が76.1%であった。また、現役の雇用労働者世帯は全体の約４割を占めていたが、規模30人未満の事業所に働く労働者やパート・アルバイトなどの「不安定雇用者層」が相対的に高い比率（17.2%）を示していた。聴覚障害児・者とその家族の生活問題の根底には、雇用・労働条件の不安定さや年金など社会保障給付の問題が横

たわっており、それに規定されてコミュニケーションに関わる困難（障害）が現れてくるという構造になっている。雇用・労働条件や年金などくらしの基盤が不安定な世帯では、身近な地域における交流や活動に参加している割合は低く、社会的に孤立しがちな状態に陥っている。障害者団体の活動に参加していない場合は、いっそう地域で孤立し深刻な問題を抱えているのである。

第二に、これら世帯では、生活に欠かせない社会福祉制度や京都市聴覚言語障害者センターが提供するサービスをはじめ、その他の多くの社会制度に関する頼りになる情報が乏しく、必要な制度・施策の利用に結びついていないことも明らかになった。その結果、ますます生活全般に厳しさが増し、自身の健康破壊が広がっているのである。

利用している制度やサービスについては、障害基礎年金が不十分という問題に加えて、最近の税制改革や医療・社会福祉制度の構造改革による利用者負担増が生活全体を直撃している実態も明らかになった。とくに無業者層や不安定雇用者層にその矛盾が鋭くあらわれており、障害者自立支援法の基本的な問題点が浮き彫りになった。

第三に、家族介護が困難な単身や夫婦二人暮らし、複数の障害者が同居している世帯、さらに重度重複障害者を抱えている世帯などでは、健康やいのちの安全にかかわる問題をあげている世帯が著しく高い割合を示していたことも特徴的であった。これらは、わが国社会福祉施策・サービスが家族介護を前提にしていることの矛盾や重度重複障害に対する対策の不備・不足のあらわれである。

【今後の研究課題】

今後は京都市内の各地域の地域特性の分析に取り組み、具体的な地域生活に対する課題を明らかにしていく予定である。また、手帳を有しない世帯の課題と対策、重度重複障害の世帯の課題と対策についての分析を深めるとともに、国外における実践等を踏まえ、聴覚障害児・者福祉あり方を提起していきたいと考えている。

共同研究

平安時代寺院聖教と古記録の研究

研究代表者・准教授　東舘紹見
（日本仏教史学）

本研究は、2005年度における佐々木令信名誉教授を研究代表とする共同研究「平安時代古記録の研究」で得られた成果に導かれつつ、本学博物館所蔵の古記録（日記）である『春記』（記主藤原資房〈1007～1057〉、重要文化財、長久2年〈1041〉2月条）の本文、及び紙背に書写されている東密僧寛有の著作『顕密立教差別記』それぞれの内容を検討し、併せて特に日記本文と紙背聖教との関係について整理・考察することを課題とし、発足した。

殊に本年度は、本学所蔵の『春記』を含む「東寺本」と称されている平安時代末頃書写の一連の写本（宮内庁書陵部所蔵本八巻、京都国立博物館所蔵本三巻、及び本学所蔵本一巻）のすべてにわたり、その紙背に東密系の聖教が記されている点、就中その聖教の多くが同時期に活躍した東密僧の寛有の著述である点に注目し、かかる状況が成立した背景である寛有の世系・法系両面における事実関係・動向について確認することを研究の主眼に置いた。以下、本年度の研究において明らかにし得た点を略記する。

1．寛有の世系、及びその学僧としての活動との関わりについて

① 寛有は、右大臣藤原頼宗（「御堂関白」として知られる藤原道長の息）の曾孫に当たる人物で、その父祖は、祖父能季の代までは公卿として順調に昇進を遂げている。しかし能季が、正二位権中納言在任中に39歳をもって病死して以後、その息有家（寛有の父に当たる）が30年余りにもわたって近衛少将に据え置かれる等、官人として停滞・凋落の傾向が顕著となる。また、有家以外の能季の息男が全て出家し顕密諸宗の僧となっている事実も確認できる。以上の点より考えて、有家の息寛有の出家も、当時の彼の置かれた世俗的環境に由来するところが大きかったのではないかということが推定される。

② 寛有の祖父能季と父有家の官歴を検すると、ともに近江介・近江権守を歴任していることが注意される。

寛有は、近江石山寺で伝法灌頂を受けており、彼の著になる『四種大乗浅深記』（京博本第三巻の紙背）の奥書には、近江に存在したとされる光明寺で著した旨が記されている。また、同じく寛有の著『大日経秘要抄』（書陵部本第三巻～第七巻の紙背）並びに『秘密十地研鏡抄』（京博本第一巻の紙背）の写本は、近江石山寺に残されている。こうした一連の事実は、近江国が彼の重要な活動基盤であったことを示しており、このことを可能とした要因の一つとして、寛有の祖父藤原能季・父有家の上述の官歴と、これを通じた近江との何らかの地縁的・人的交流や社会的基盤とが考えられる。

なお、寛有は、世系としては、藤原北家の中でも九条流―御堂流―頼宗公孫の庶流に属する。すなわち、『春記』本文の記主で小野宮流に属する藤原資房とは、同じ北家藤原氏とはいえ世系において相当の懸隔がある。この点において、『春記』本文とその書写からあまり時期を置かずに筆写されたと思われる紙背聖教の著者寛有との関係を直接的に想定することは、現在のところ難しいといわざるを得ない。

2．寛有の法系、及び東寺本（殊に京都国立博物館所蔵本三巻）の紙背に見られる特徴について

寛有の法系及び事績については、多くの教学的な著述を残し、学匠としての位置づけが確かなものであったことが既に明らかになっている。本年度は、この事実を踏まえ、特に東寺本『春記』の紙背聖教、中でも数度にわたり閲覧・調査した京都国立博物館所蔵本三巻の紙背について、重点的な調査・考察を行った。

① 京博本第一巻の紙背には、寛有の著『秘密十地研鏡抄』が記される。調査によって、本聖教に付された訓点が御室仁和寺系統の円堂点であること、ヲコト点の形状から見ても平安時代末の書写の可能性が高いことが明らかとなり、本学所蔵本と共通する特徴を有すること、著者及び系統が明確な当該期の寺院史料として高い価値を有することが改めて確認された。

② 同第二巻の紙背には、醍醐寺座主、東大寺別当を歴任した当該期を代表する東密僧勝賢自身の奥書がある「如法尊勝法支度文書」が記される。この聖教については、勝賢の師僧寛信が記し残した「勧修寺寛信法務記」等、「日記」と呼ばれた修法の記録類に基づいて形成されたものと考えられる。なお、東寺本のうち、紙背が著述ではなく「支度文書」の形式を取っているのは本巻のみであるが、『春記』本文に注目すると、日次の点で他の巻との繋がりが強いものであることが確認され、今後、本「支度文書」が他の著述とともに書写の対象となる聖教として選定された理由を考えてゆくことが新たな課題となった。

③ 同第三巻の紙背には、「寛有作」と明記される『四種大乗浅深記』が記される。同書には、「永万二年（1166）」と年代を明記する元奥書と見られる奥書が存在することから、少なくとも『春記』本文が永万二年以前の書写にかかるものであることを確認することができた。

なお、全体に共通する特徴として、『春記』本文と紙背聖教の書写年代について、さほど時間的な隔たりがないこと、紙背の巻尾に白紙部分が多いことから、聖教の料紙としてあらかじめ考えられていたであろうことも判明した。

以上に略記した調査及びこれに基づく検討を通じ、本学所蔵本を含む東寺本『春記』をめぐり、これまでの知見に加え、新たな種々の事実を明らかにすることができた。ただ、こうした、紙背に東密系の聖教を持つ古記録が何故成立し、どのような経緯で東寺において伝世されてきたのか、この基本的な疑問点については、種々の可能性が考えられるものの、なお明確な答えを出すには至らなかった。これまでに知られなかった種々の事実を明らかにし得た今、かかる疑問点について、一層注意深く考察を進める必要があると考えている。

個人研究

『浄土論註』研究
―親鸞の視点より―

研究代表者・教授　延塚 知道
（真宗学）

『浄土論註』の思想究明―親鸞の視点から―という書名で2008年５月に出版をするために、一年間、研究会を進めた。延塚が原稿を書き、研究補助員と読み合わせをして、意見を聞き、原稿の手直しをするという方法を採った。原稿作成という意味で特に力を注いだのは、第七章にあたる浄土の荘厳と第八章にあたる仏法不可思議と海の譬えであった。

世親の『浄土論』には浄土の荘厳功徳が二十九種説かれるが、親鸞はその荘厳の中で限られた荘厳功徳にしか注目しない。ちょうど四十八願の中でわれわれが仏道を

成就するために必要な真仮八願に注目するのと同じように、その仏道を根源的に支えていく真実報土を表す荘厳功徳のみを取りあげるのである。それは、(一) 清浄功徳、(二) 量功徳、(三) 性功徳、(四) 妙声功徳、(五) 主功徳、(六) 眷属功徳、(七) 大義門功徳、(八) 一切所求満足功徳、(九) 衆功徳、の九つ程の荘厳功徳である。したがってその一つひとつの意味を親鸞が読んだであろう方法、即ち、われわれの仏道を根源的に成り立たせる働きとして尋ねることに専念した。

さらに第八章に当たる仏法不可思議と海の譬えの原稿も作成した。曇鸞の三厳二十九種の註釈をよく読んでみると、重要な功徳に仏法不可思議という言葉と海の譬えが繰り返し出てくる。しかもその二つはお互いに関係しながら、その言葉が出てくる功徳に止まらないで、『論註』全体に通底していることが思われる。親鸞は、『教行信証』の絶頂とも言える「行巻」の一乗海釈の海を、転成(凡夫をそのままで仏になる者に転じる働き)と不宿(本願の真実の世界には決して自力を入れないという働き)の二義で自釈する。さらにこの転成と不宿を助顕するために、『論註』の不虚作住持功徳の文と衆功徳の文の曇鸞の註釈を引文する。したがって仏法不可思議とは凡夫が凡夫のままで仏になる道に立つということであり、それを実現する功徳こそ不虚作住持功徳である。また海の譬えとは、死骸を岸に打ち上げてしまうという譬えである。それは、本願の真実性を保つために徹底して自力を排除するという不宿を意味するのであり、それを実現する功徳として衆功徳を挙げると考えられる。そこに、凡夫のままで本願の道理によって必ず仏になるという、他力の仏道の核心が語られているのである。この第八章は、『論註』の文によってそのような意味を読み取りながら原稿を作成した。

そのようにしてできあがった原稿の全体、即ち、「序章」・「第一章　親鸞が仰いだ曇鸞」・「第二章　親鸞が仰いだ曇鸞の功績」・「第三章　親鸞の『教行信証』と『浄土論註』」・「第四章　曇鸞の二道釈」・「第五章　八番問答」・「第六章　五念門」・「第七章　浄土の開顕」・「第八章　仏法不可思議と海の譬え」・「第九章　本願力の開顕」・「第十章　二種廻向の開顕」であるが、その全体の語句の統一、出典の統一、引文の旧漢字を新漢字に改めること、さらには書物用に分かり易い語句に代える等の作業に相当の時間を費やした。

このような一年間の研究によって、『浄土論註』の思想究明－親鸞の視点から－という書物として文栄堂から2008年5月20日に出版の運びとなった。A3版246頁、詳しくは書物を読んでいただければ幸いである。

個人研究

ジャック・ラカンの精神分析理論による演劇の分析の意義と可能性

研究代表者・教授　番場　寛
(フランス語・フランス文学)

ジャック・ラカンは自己の精神分析理論を説明する際、『ハムレット』やポール・クローデルがクフォンテーヌ家の三世代を描いた三部作を論じているが、それらの作品分析がどの程度、正しいのかという問題と、彼の分析理論が他の劇作品の分析にも有効なのかという点に興味を抱いて研究計画をたてた。その一環としてフランスに行き、見聞したことから得たものを今回は報告したい。

講演会

ラカン派の一つ、「フロイトの大儀派」の講演会、「ヒステリーの昨今」というテーマのもとに数回にわたって行なわれるものに出席した。実際の臨床例を紹介した上で、理論的解釈が紹介されるものと予想していたが、実際はクエンティン・タランティーノというアメリカの映画監督の作品を例として、そこに描かれた登場人物に見られるヒステリー的特徴を分析するものであった。　翌日に出席した授業は、パリ第8大学の授業であるとともに「フロイトの大義派」の中心人物であるジャック・アラン・ミレール氏の思想を一般人に向けて公開するという目的で、「ラカン的指導」というテーマのもとに毎週行なわれている授業である。その日の話の内容は、「液状の精神分析psychanalyse liquide」という耳慣れない概念を提示して展開したが、ラカンの「無意識は言語として構造化されている」というテーゼのもとにシニフィアンに着目して分析が行なわれるという一般的な考え方に対し、主体の無意識においてシニフィアンに還元できない要素にも着目して分析を行おうという考え方を提示したものと思われる。

演　劇

次に今回のもう一つの大きな目的であった劇の観賞について報告する。パリに到着した翌日の日曜日には、パリの郊外のヴァンセンヌの森で活動しているアリアーヌ・ムヌシュキン率いる「太陽劇団」の新作(パリでは

再演）「つかの間のものL'Éphémère」という劇を見た。

場面は、母親が亡くなり住んでいた庭付きの家を売らなければならなくなった成人した女性が電話をしているところから始まる。観客はすぐに気づくが、登場人物は、移動が可能なように底に幾つかの車輪をつけた大きな円盤の上で演技し、その円盤を黒子として移動する役の人物は観客の目には見えていても、演劇上の人物としては見ないルールがすぐに納得される。俳優を乗せた舞台であるそうした円盤が次から次へと両側に階段状に向き合わされた観客席の間の通路を通過していく。それを見ながら舞台の上の人物を実際の人物のようにみなしその言動を精神分析理論で分析できるのであろうかと考えると、かなり困難なように思えた。しかし出現しては消えていくそれらの円盤形の舞台を見ていて、ある形式が繰り返されていることに気づいた。円盤形の舞台はそれぞれが部屋を表しているものが多い。それぞれの部屋に机と椅子とソファがあり、家族の誰かと思われる写真が飾られており、登場人物はそこから電話で誰かと話す場面が多い。誰か訪問者がある場合は、別の円盤に乗せられたドアを別の人物がたたき、それを受け入れるか、拒絶する。人物が違っていても、あるいは違っているだけに、人間の営みの共通性、普遍性が際立っていたように思われた。

さらに、それぞれ別の日にモリエール作の「女の学校」と、ラシーヌ作「ベレニス」という古典劇を見た。前者は喜劇で後者は悲劇であり、台詞回しも演出も全く対照的であった。しかしどれほど二つの劇がかけ離れて見えようとも共通点も見出せないこともない。ともに結婚という人間社会の制度化されたシステムの中で、ひとりの人間としてもうひとりの人間を愛したとき、そのシステムとの軋轢が生じることがある。そういう視点に立つと、まったくそれらの劇とはかけ離れたものに思えた別の劇場で観た「カフカの舞踏会」という現代劇も、実生活において「書く」という創造の苦しみと同時に彼に始終つきまとった「結婚」という強迫観念も、個人の欲望と「家」という象徴体系、あるいは「父」との対立の産物として描かれていたのだと思えてくる。

ルイーズ・ブルジョワ展

パリに到着後、ポンピドゥーセンターの近現代美術館で「ルイーズ・ブルジョワ」の展覧会を知り観覧した。彼女の作品（絵画、彫刻、インスタレーション）は精神分析理論によってこそ解釈できるものであると思われ、私は5月開催の「日本病跡学会」で彼女の作品の精神分析理論による解釈を発表した。

「国際ラカン派協会」の研究会、「拒食症と過食症―論理、治療―」

今回の調査の中心となる研究会である。テーマは摂食障害である。ラカンは「拒食症者は食べないのではない、無rienを食べているのだ」という有名な言葉を残しているが、その場合の「無rien」とは何かという点を巡って多くの意見が交わされた。乱暴に図式的に言えばラカン派の精神分析理論はシニフィアンで人間の心身が支配されていると考えでなりたっているが、そのシニフィアンに還元できない欲望の原因対象となるものを「対象a」と名づけて、それとシニフィアンとの関係で心身の構造を説明しようとする。しかし問題は摂食障害者の対象となるその「無」というものをどう理論づけるかという点である。また、普通摂食障害が人間の「口唇的欲動pulsion oral」に関係していることには誰も異論はないと思われるが、特に若い女性においては同時に「眼差し」という欲動にも関係していることが指摘されたがもっともだと思われた。

ラカン理論がけっして机上の空論ではなく、いまなお人間認識と同時に臨床面でも有効だということを再認識させられた研究会であった。

海外学会参加報告

新たな「宗教間対話の時代」の到来
—第20回オックスフォード円卓会議に出席して—

教授　安冨　信哉

はじめに

昨年（2007年）11月1日付けで、オックスフォード円卓会議（Oxford Round Table）事務局より、小生に宛てた案内状を頂いた。文面では、この会議は、オックスフォード大学を構成するいくつかのカレッジの協定のもと、20年前から始まり、現代の諸問題について、世界各国から学者を招聘して行う、非営利的な、学際的フォーラムであるとのことであった。

第20回目を迎える円卓会議の今回のテーマは、

Religion : The Politics of Peace and Conflict

（宗教：平和と紛争の政治学）

というタイトルで、明年（2008年）の7月13日から7月18日まで開催し、その趣旨として、今日、中東を始めとして、宗教間紛争が頻発し、"文明の衝突"（Clash of Civilizations）が生じているが、これを中心に対話したい、と記されていた。2005年7月のロンドンでの地下鉄・バス爆破事件（自爆者を含め、56名死亡）、2007年6月のロンドンおよびグラスゴー空港での爆破未遂事件など、イスラム教過激派のテロに悩まされる英国ならではのテーマ設定であると思われた。

この申し出について、大学当局と相談し、真宗総合研究所「国際仏教研究」班の派遣者として、この会議に出席することが決まった。真総研は、2006年に、『蓮如：現代日本仏教のルーツ』（Rennyo and the Roots of Modern Japanese Buddhism）という論集を、小生とマーク・ブラム氏（Mark L. Blum, ニューヨーク州立大学准教授）との編集で、オックスフォード大学出版局より刊行したが、そんな経緯もあって、今回、指名して頂いたのではないかと思う。

1、会議の概要

本会議に出席するべく、酷暑の7月11日（金）、関西国際空港より、KLM機に搭乗、アムステルダムでの乗り換えを経て、ロンドン・シティ・エアポートに着いた。そのあと、タクシーでロンドン市内に入り、パディントン駅より、一時間弱、電車に乗って、オックスフォードに入った。この市は、AD8世紀に建てられた修道院が発祥で、テームズ河の牛の渡し場があったことから、この市名が付いた。13世紀に大学組織ができて、次第に発展したという。小生は、今回はじめて英国の地を踏んだが、中世都市さながらの壮大な街の景観に圧倒される思いであった。オックスフォードには、39のカレッジがあり、総合大学が形成されている。2007－2008年現在、19,993人の学生（男子54%、女子46%）が在籍し、うち米国から1,413名、中国から699名、ドイツから572名の学生が留学している①。私が訪れた時は、すでに大学は休みに入っており、学生の姿はみえなかったが、街には、観光客があふれていた。こちらは外気が涼しく、長袖を着ている人が目についた。

7月13日（日）より、ジーザズ・カレッジ（Jesus College）内の宿舎に入った。石造の古い建物で、1500年代の建築とのこと。小生にあてがわれたのは、五階のベッド、シャワー、トイレ、書斎を兼ねる造りで、エレベーターがないのが不便であったが、質素ながら清潔な一室であった。

夕方、七時より中庭でレセプション、七時半よりダイニング・ルームで開幕の夕食会が催された。歓迎の意をこめて、はじめに歴史家のブライアン・マレー（Brian Murray）教授がオックスフォードの成り立ちについて、つぎに名誉評議員（Canon）であるブライアン・マウントフォード（Brian Mountford）教授（大学教会牧師）が円卓会議の開催主旨と経緯について、それぞれ紹介した。

今回の参加者のリストをみると、オックスフォードの関係者のほか、発表者、ディスカッサン、欠席者を含めて、36人の名が記載されている。日本からの出席者は、小生の他、くらしき作陽大学教授の松田正典氏（同大学仏教文化研究センター長、広島大学名誉教授、理学博士）、同大学教授の秋山博正氏、さらに名古屋市立大学准教授のランジャナ・ムコパディヤーヤ氏、愛知大学教授のアイヴァン・コスビー氏の5人であった②。

発表（者）を一瞥して明らかなように、キリスト教関係者で、英語圏の出身者が多い。したがって、「異」宗教間対話というより、「同」宗教間対話の趣きが強いというのが率直な印象である。キリスト教諸宗派では、これもまた大切なのだろう。そしてそのことが、今回の会議の別な基調をなしたといってよい。

7月14日（月）朝から、プレゼンテーションとディスカッションが始まった。会場は、ジーザズ・カレッジから数分歩いたオックスフォード・ユニオンの会議室で、すべてのセッションは、マウントフォード氏が座長（司会・進行役）を務めた。

2、各氏の発表題目

セッションⅠ（7月14日）

(1) Religion: The Politics of Peace and Conflict in Intimate Spaces/ Christina Landman（South Africa）
(2) Perceptions of Non-American, Evangelicals in a Post Modern and（almost）Post Bush World: The United Kingdom, Australia and France/ Jennifer Hate（Australia）
(3) Interfaith Dialogue and Salvation: Is There One Heaven in Our Future?/ Leon Strieder（USA）
(4) Reconciliation in Rwanda/Stephen Lowe（USA）
(5) Plurality and Peace: Ineterreligious Dialogue in a Creative Perspective/ Ruth Illman（Finland）
(6) Politics Informed by Faith/Kenneth B. Cragy（USA）
［午後：オックスフォード大学のカレッジめぐり（徒歩ツアー）］
(7) Religion as Non-State Actors in Peacebuilding and Development: The "Global" Aspects of Engaged Buddhist Movements/ Ranjana Mukhopahiyaya（Japan）
(8) Spiritual Primitivism in Willa Cather's Fiction of the West/ Claudia Teinert（USA）

セッションⅡ（7月15日）

(9) The Parable of the Good Samaritan: Exegesis and Exposition/ Blaine Chorles O'Connor（USA）
(10) The Religions of the World in War and Peace, Conflict and Concord/ George F. Fry（USA）
(11) Beyond 'Attachment'/Shin'ya Yasutomi（Japan）
(12) Teenage Suicide Missions: The Role of Religion in the Recruitment of Young Suicide Bombers/William Emilsen（Australia）
(13) Religion: Causes on Conflict and a Way to Peace/Sylvia Meadows（USA）
(14) The Liberal Clergy's Image of Politics in 1848-49/Peter Zakar（Hungary）

セッションⅢ（7月16日）

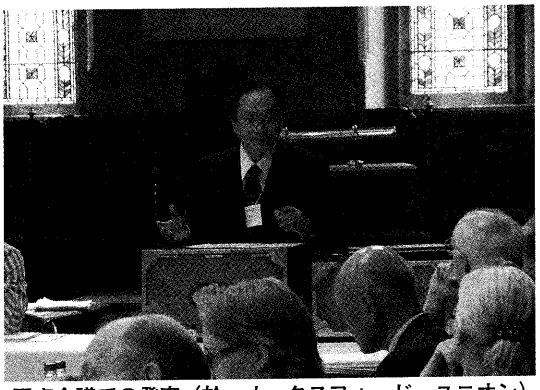
(15) Religion, Politics and Conflict in the 21st Century: A Study of the Activities of Selected Muslim Youths in North-East Nigeria/Ahmed Hammawa Song（Nigeria）
(16) Bonhoeffer Revisited: On Courage and Conflict in the Postmodern Culture/ Ava Pickard（USA）
(17) One's View of the World for Saving the Tragedies in the Period of Paradigm Shift-Concerning with Peace and Modern Conflicts/ Masanori Matsuda（Japan）
(18) One's View of the World for Saving the Tragedies in the Period of Paradigm Shift-Researching the Thoughts of Tang Era Monk, Shan'tao/ Hiromasa Akiyama（Japan）
(19) Everybody But Rizzo: Using the Arts to Transform Communities/ W. Alan Smith（USA）

セッションⅣ（7月17日）

(20) Alienated Neighbors: Responding to the Cronulla Race Riots for Christ's Sake/Clive Pearson（Australia）
(21) Confronting Peace…An Ethical Analysis of Affirmative Action in the U.S. through Reinhold Niebuhr's Methodology/Bruce Grady（USA）
(22) The Moral Virginia: On Her Majesty's Solemn Obligations to the Virginia Indian Nations/Jay Hansford C. Vest（USA）
(23) Making a Commitment to 'Offer Body and Shed Blood': Revolutionary Christians in the Philippines/Anne Harris（Australia）
(24) Absence of Moderation Theory/Jasper Watson（USA）
(25) Is Religion the Cause of Conflict?/Ivan Cosby（Japan）
［午後：ブレンハイム宮殿、チャーチル元首相の墓地へのバス・ツアー］

3、拙論「執（とら）われを超えて」要旨

上記のように、計25人の発表（各15分）があり、そのあと、ディスカッション・リーダーを中心とする質疑応答（各15分）が設定された。私は、7月15日（火）に「執われを超えて」（Beyond 'Attachment'）と題して、1.「日



円卓会議での発表（於　オックスフォード・ユニオン）

本の歴史的経験」、2.「仏教の立場」という二つの項目を立てて、発表した。要旨は、以下の通りである。

1.「日本の歴史的経験」

a. ファンダメンタリズム

1980年代から、「グローバル化」が政治、経済、文化の様々な領域で進む一方、これに抗して、世界で、固有の文化や宗教的価値観を護ろうとする動きがでてきた。ある意味で、これは当然の流れである。しかしそれが、他の文化や宗教に対して、排外的で攻撃的な性格を帯びてくるとき、問題を孕む。いわゆる「ファンダメンタリズム」は、その極端な例である。ファンダメンタリズムは、どの宗教においても最右翼に位置する。

日本のある宗教学者は、「戦前の国家神道は、今日のイスラム世界における『ファンダメンタリズム』、少なくともヒンズー・ナショナリズムに極めて近い」と発言した③。国家神道をファンダメンタリズムと呼ぶことは、いま少し検討を要するかもしれないが、戦前の日本が、国家神道の体制下、偏狭なナショナリズムに支配されたことは紛れもない事実である。

b. カルト

第二次大戦後、国家神道は、GHQ指令により解体させられたが、「新宗教」が、生命を吹き返して隆盛した。産業化と都市化は、多くの人々を既成宗教から乖離させ、新宗教が育つ素地を提供した。新宗教の信徒は、その多くが貧病争からの救いを願い、現世利益を求める人たちであった。

1970年代に入ると、新しいタイプの宗教が興ってきた。宗教学者は、これを「新新宗教」と呼んでいる。高度なテクノロジー社会の中で、高学歴の若者たちのある者は、精神的空虚感に襲われ、合理主義を超えたものを求め、カリスマ的人物に指導される熱狂的な小宗教集団のメンバーになった。これを「カルト」と呼ぶことができよう。

1984年に設立されたオウム真理教は、そのひとつであるが、1995年には、地下鉄にサリンを撒き、15人の犠牲者を含め5,510人の被害者をもたらした。彼らは、ハルマゲドンという終末論的な観念に取り付かれて、無辜の人々を殺傷したのである。

2.「仏教の立場」

a. 二つの執われ

日本の戦前のファンダメンタリズムと戦後のカルトを結びつけることは、難しいかもしれない。しかし、自らの「教義」を絶対化し、外の世界に門戸を閉ざすという点において、両者はある意味で共通している。

それでは、私たちは、この問題について仏教から何を学ぶことができるのだろうか。よく知られるように、仏教は、人間の根源的な障碍として、「エゴ」の問題を取り上げる。エゴとは、自己への執われ（我執、ātma-grāha）である。仏教は、この我執を迷いの根源として批判する。しかし私たちは、同時に、仏教が教えへの執われ（法執、dharma-grāha）を批判していることに気づかねばならない。仏教の歴史を振り返ると、大乗仏教が成立する過程で、般若の智慧が強調されてくる。ここに無我（anātman）とか、空（śānyatā）の思想に基づいて、二空（我空・法空）が説かれた。

b. 人間性の自然に帰る

宗教間紛争の底にあるのは、「執われ」の問題である。様々な宗教的伝統を背景にして、ここに出席した私たちに大切なことは、執われを離れ、一人の人間として対話の席に着くことである。世界の宗教の歴史を回顧すると、宗教がしばしば人間性を阻害したことが容易に了解される。それは、宗教の問題ではなく、宗教を受け取る人間の問題、すなわち「エゴ」の問題である。法執についての仏教のメッセージは、このような人々に警告を発するものである。私たちは、自らの教えへの執われを離れ、他の宗教に属する人々と対話を始めねばならない。「宗教的多元主義」（religious pluralism）が主唱される現代、対話の輪に加わり、相互理解を深めねばならない④。

以上が、拙論の要旨である。これに対して、ディスカッサンの北アリゾナ大学社会学准教授・ディヴィッド・マッケル（David Mckell）氏をはじめ、いくつかの質問を受けた。(1)高学歴の若者が、なぜカルトに走るようになったのか。(2)「執われを超える」というテーマを、現実の政治状況の中で、どう反映させるのか。(3)世俗化時代の到来と、新（新）宗教の出現に対する既成仏教教団の対応はいかなるものか、などについて問われた。限られた語学力で十分に質問に答えたとは言いがたいが、大切な課題を与えられたと思う。

おわりに

わずか一週間という短い期間ではあったが、英国に滞在し、日々の報道などに接して，こちらでは対話をもつことがいかに重大事であるかという印象を受けた。ヨーロッパでは、キリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒、すなわち「アブラハムの宗教」（Abrahamic religion）の信徒は、ともに生活し、それゆえに相互に尊重し、理解し、共存していかねばならないのである。

しかし他方では、これらを阻害してきた長い歴史とテロリズムに象徴されるいまの現実がある。これは否定し

ようもない事実である。今回の会議で、ルワンダ、ナイジェリア、アメリカ・インデアン居留区、フィリッピンなどの地域での宗教間紛争とその解決に向けての努力に関する事例報告があったが、同時に、宗教間紛争において、その元凶の一つとなっているファンダメンタリズムの問題がクローズアップされた。「執われを超えて」という私のプレゼンテーションは、これを視野に入れての仏教徒の側からの提言の試みであった。幸い、一定の共感を出席者の方々から頂くことができた。

諸外国からの研究者とともに（於 ジーザズ・カレッジ）

7月14日、15日両日の会議を通して、各発表者の間で、「ファンダメンタリズム」という語が、キー・ワードのように頻出した。また、ブッシュ政権下での「エヴァンジェリカル」（福音主義）の立場が、キリスト教世界の横断的問題として提議された。そのようなこともあって、7月16日朝、会議に先立って、「両者をどのように位置付けるか、整理する必要があるのではないか」との発言が会場よりあり、座長のマウントフォード氏より、これに対する応答があった⑤。

アブラハムの宗教に属する人たちにとって重大な事柄は、仏教徒にとっても看過できないはずである。アジアやアメリカに住む仏教徒は、同じ問題を抱えている。彼らの周囲には、異なった宗教的背景をもつ人々が存在しているからである。しかしキリスト教徒が人口の一割にも満たず、イスラム教徒も稀な日本では、宗教間紛争が存在してきた歴史的事実が乏しく、それゆえに仏教徒の間では、宗教的対話（interreligious dialogue）は、あまり必要視されてこなかった。「異」宗教間対話のみならず、仏教徒同士の「同」宗教間対話も少ない。

もとより仏教の学者は、キリスト教徒との対話をもってきた。過去には、パウル・ティリッヒやジョン・カブというような著名な神学者との対話の機会ももたれた。日本への土着化を課題としているキリスト教側からの仏教研究は少なくない。また、マールブルグ大学と本学との学術交流が示すように、真宗とキリスト教神学との対話も重ねられてきた。

これらは、非常に大切な対話の試みである。ただ、宗教間紛争の現実がない日本では、宗教間対話は、知的レベルにとどまっている。生活レベルにまで及んでいくことは稀である。ハンチントンのいわゆる「文明の衝突」は、日本では、重大な国内問題になってはいない⑥。しかしながら、他宗教への無関心、そして無理解、無感覚は、グローバル化の進む現代、やがて近いうちに、私たちに深刻な問題を引き起すことになるであろう。

7月17日（木）、会議は終幕を迎え、夕食会が交歓会となり、参加者各自にマウントフォード氏より証書が手渡された。18日、最後の朝食会があり、私は、荷物をまとめて、オックスフォードよりヒースロー行きのバスに乗車した。7月19日（土）、ヒースロー空港より、KLM機に搭乗、アムステルダム経由で、ふたたび酷暑の関西空港に降り立った。

振り返ってみると、出席者の様々な英語とキリスト教の教義のことばが飛び交うなか、非英語圏の一仏教徒である私が、円卓会議のディスカッションの輪のなかに入るのは容易ではなかった。しかし、いま、新たな「宗教間対話の時代」が到来しているとの実感は、ますます強くなっている。

註

①この数字は、Oxford Round Tableで配布された大学の現況に関する紹介記事によっている。

②なお、松田・秋山両先生には、仏教伝道協会の大來正順氏が、補佐役として同行した。仏教伝道協会は、オックスフォード大学における「仏教学講座」開設に向けて基金を募り、2008年9月より、新たに仏教学の講義が再開されることになった。

③島薗進「ファンダメンタリズムの現在」『論座』2008年7月号、190頁、朝日新聞社。

④John Hick 著 "Problems of Religious Pluralism", Palgrave Macmillan, 1985, 間瀬啓允訳『宗教多元主義』法蔵館。

⑤福音主義の問題は、私たち仏教徒には理解の難しい事柄であるが、私は、Oxford University Press Books Shopで求めたJames K. Wellman, Jr.著 "Evangelical vs. Liberal" Oxford, 2008, という書を理解の一通路として興味深く読んだ。

⑥Samuel P. Huntington著 "The Clash of Civilizations and the Remaking of World" Simon & Schuster, 1996. 鈴木主税訳『文明の衝突』集英社。

研究調査出張報告

本願所寺院組織の確立と信仰文化の形成・伝播に関する歴史民俗学的研究
—寺社修造の「本願」研究の史料発掘—

一般研究（豊島班）研究代表者・教授　豊島　修
協同研究員・前任期制助教　加藤　基樹

日本において伽藍・境内を構えた寺社が、古代・中世的システムではその維持管理、または式年遷宮などが立ち行かなくなってきた頃—すなわち中世の終り、近世的社会の立ち上がりの時期—、再び寺社の霊験譚を説き、結縁を勧める勧進聖の活動をもって募財調達システムが求められた。ここで「再び」といったのは、古代末・中世前期に行基菩薩や俊乗房重源、あるいは禅律僧たち「職(しき)」による勧進・造営のシステムの再来かにみえるからであるが、時代性、すなわち政治的・経済的背景は変化しており、十穀聖や木食聖などの動向一つをとってみても、質的に全く異なっているといってよいだろう。

本研究が対象とする「本願」、または「本願所」というのは、そうした寺社の造営・修復の役を担い、その修復料としての米銭の喜捨をもとめて諸国を廻国勧進し、寺社の縁起や霊験を唱導した宗教者、または勧進を専らとする宗教者を統括する組織をいう。実際、熊野三山をはじめとする寺社では、本願の勧進活動によって、堂社の修復が成ったことは史料的に確認することができる(『熊野本願所史料』清文堂)。またこうした「本願」の活動は、勧進が単なる募財調達でないことを物語るように、勧進に赴いた各地へ、当該寺社に関する様々な信仰文化を伝播・定着させることとなった。

このように「本願」を研究素材に設定し、文化史的展開を跡づけようとする研究を推進するさい、大きく①「本願」の組織的実態、②「本願」の勧進活動などが主たる問題となる。

「本願」は、15世紀後半頃より全国の寺社に出現し活躍したことが史料的に知られる一方、近世初期になると社家や寺家との争論が頻発し、職掌や役割が制限されたり、追放されたりする「本願」もいた。本研究は、大きな課題のなかでも、まず史料的に諸国の「本願」の歴史的・組織的実態を究明し、研究の進んでいる熊野「本願」を留意しつつ、「本願」の多様性とその歴史的意義を見いだすことから始めている。本研究課題は、幸いにも真宗総合研究所一般研究に2年間の継続研究として採択され、各地の事例の収集と分析を進めている。

そこで本稿は、これまでに数回おこなった史料調査のうち、滋賀県甲賀と厳島大願寺における調査の概要とその成果の一端について中間報告することを目的としたい。

[磯尾・飯道山山麓文書群]

2007年5月13日（日）、畿内寺社の配札を担っていたとされる人々の実態を究明することを目的として、明治の神仏分離まで多くの坊人を抱えていた飯道山の関係史料を滋賀県甲賀市の甲南図書交流館において調査・撮影を実施した。

調査対象の史料群は、「吉田金雄家文書」、「小山晴久家文書」、「真岡家文書」である。それぞれ膨大な史料群であるが、成立年代は近世中期をさかのぼる史料はない。その意味では、本研究が着目する時代からはやや外れるが、「本願」の諸相や近世的あり方を知る上では一級史料であるといえよう。

「吉田金雄家文書」には、伏見稲荷大社の本願「愛染寺」より「円福院」という衆徒が許状を得て、稲荷大明神の札や火防の札を諸国に配札していたことが知られる一連の史料があり、その檀那帳も確認できた。配札先の檀那場は、遠隔地に及んでおり、嘉永二年五月の『御檀那記』によれば、上野国や武蔵国に及んでいることが知られる。

「小山晴久家文書」からは、京都東山祇園社（現八坂神社）の本願「成就院」の配札記録が得られた。安政三年の『諸檀家人別名面記』（教淳坊）によると、淡路国（現兵庫県淡路島）に巨大な檀那場を形成していたことがわかる。その他にも伊予国や丹波・山城などにも檀那場をもち、通年での配札を行なう、いわば配札を専業とする坊人であり、彼らは「永代日参之御札」を配り、その発給元は「祇園社　本願　成就院」とあり、近世後期における祇園社の「本願」が、こうした募財調達システムを確立していたことが裏付けられた。このほか、長谷

寺本願院発給の許状（宝永５年）も所持しており、複数の寺社の本願所との関係を持っていたことがわかり興味深いが、こうした実態がいつ頃まで遡るのかについては、今後の史料発掘が待たれる。

「真岡家文書」は、多賀大社の本願「不動院」の坊家として、その由緒を知りうる史料が伝存することが知られた。また配札に用いた御札の束が帯封を纏ったまま発見され、些末なことかも知れないが、寺社所有する版木にてあらかじめ版摺したものを配札の権利を与えた者へ下しており、御札の版権は「本願所」が有し、配札業務委託システムが整っていたことがわかった。なお、当家には膨大な諸国寺社の御札を重複して所持しており、今に伝存しているが、配札先で得た物なのか、その由来・伝来については不明である。

これらの坊家は、磯尾集落に位置した山伏で、本山・当山（聖護院と三宝院）の修験道両派から許状を得ている里修験であった。こうした近世後期の修験集落の実態だけでなく、「本願」との関わりを通して、「本願」そのものの性格を知る上で意義深い調査結果が得られた。

[厳島本願大願寺]

2008年５月24日（土）、本研究の課題である　本願所」の歴史的展開の諸類型の一つとして研究対象としている厳島神社本願について考察を進める目的から実施した。

大願寺は、中世から近世にかけて厳島神社（現広島県廿日市市）の社殿、ならびに大鳥居の修復・造営事業を受け持ったことが既に知られている。大願寺にはおよそ1000通に登る中世・近世文書が現存するものの、今日、必ずしも近世史料の翻刻公開は十分ではなく、その近世的展開については、実はあまりよく知られていない。

この度、大願寺住職よりご許可を得て、２日間の日程で大願寺文書の調査を実施することができた。

史料はすべて大願寺に収められ、およそ100通（封筒入）宛に分かれて桐箱に収められている。大願寺文書中の中世文書はそのほとんどが『広島県史』、または『宮島町史』に翻刻収録されている関係から、桐箱における分類も『県史』と『町史』に大別されている。今般、本研究班が調査対象とした文献は主として近世文書であり、それは『町史』に分別されたものを多く含んでいた。

さて、作業の手順は、県史・町史とも、編纂作業時においてすでに史料を全件撮影し、それを写真帳化されたものが備わっていたため、調査員が分担で写真帳を元に該当史料を摘出する作業から進めた。各々が史料の一つ一つについて所見をとり、精査の必要性を記録し、適宜、史料内容の特徴について確認した。この作業は、二日目も続けて行なった。二日目は、前日に摘出した史料の原本調査、ならびに撮影作業を平行して行なった。撮影枚数は300カットを超え、その史料についてはこれからの研究活動において熟読し、考察を進めていく。その研究成果は今年度末に『寺社造営「本願」の研究』（仮題）と題し、事例研究を中心とする論文集を著わせるよう鋭意分析をしている。

総じて、従来不明な点が多かった近世大願寺の史料を調査させていただいたことで、①近世大願寺の一山組織の問題、②近世大願寺の「本願」としての名乗りの問題、③近世大願寺の宗教的活動の問題、④近世大願寺と厳島社との関わり、⑤年中行事や伽藍、その他住持の継承など、の諸問題について明らかにしうる史料が発見されたことは、ひとまず実地調査を実施した成果として報告できる内容であろうと思われる。

今後、さらに全国に点在する「本願」の諸相について、史料調査を実施する必要性がますます高まっただけでなく、調査によって得た史料を分析し世に問うということを、学界のみならず図らずも寺社（史料所蔵者）側でも希求されていることを実感したことは、今後の研究活動をさらに後押しすることであった。

真宗総合研究所彙報　2008.5.1～2008.9.30

■研究所関係

◎真宗総合研究所委員会

◇5月8日(木)　12時10分～（博綜館5階第4会議室）

1．2008（平成20）年度「指定研究」の研究計画並びに研究体制について

2．その他

◇7月29日(火)　12時10分～（博綜館5階第4会議室）

1．2008（平成20）年度「指定研究」の嘱託研究員・研究補助員後期採用について

2．その他

○2008年度「指定研究」庶務・研究補助員雇用契約に関する事務説明会

◇5月12日(月)　13時～
（真宗総合研究所ミーティングルーム）

○サラスヴァティ貝葉研究所との共同研究報告会

◇6月26日(木)　14時30分～
（真宗総合研究所ミーティングルーム）

・サラスヴァティ貝葉研究所との共同研究の経緯・現時点での成果・今後の見通しについて

■特別指定研究

大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念特別指定研究

◇5月13日(火)　14：30～16：00
（真宗総合研究所ミーティングルーム）

第12回公開研究会（講演）

・井上円氏（浄泉寺住職）

「名之字」考

◇6月24日(火)　14：30～17：00
（真宗総合研究所ミーティングルーム）

第15回研究会

・今後の研究活動方針について

◇9月11日(木)　13：30～16：00
（真宗総合研究所ミーティングルーム）

第16回研究会

・「思想教学の検証」について
　報告者　一楽真氏（研究員）

・「現代における親鸞思想との出会い」について
　報告者　門脇健氏（研究班チーフ）

◇9月18日(木)　16：10～18：00
（真宗総合研究所ミーティングルーム）

第17回研究会

・「史的な親鸞像の再検討」について
　報告者　東舘紹見氏（研究員）

なお、上記研究会のほか、文献目録作成についてパート会議を行った。場所・日時は以下の通りである。

場所：真宗総合研究所　御遠忌記念特別指定研究班

日時：6月3日(火)　14：30～
　　6月23日(月)　10：30～

■指定研究

国際仏教研究

〈英語班〉

①5月8日(木)　17：50～　真宗総合研究所内ミーティングルームにて、国際仏教研究のチーフ・総括庶務と各班のキャップ・庶務と研究補助員の顔合わせを行い、各班の研究計画を確認し、各補助員の業務分担を確認した。

②5月16日(金)　東京都千代田区の日本教育会館にて開催された第53回国際東方学者会議に、小澤千晶嘱託研究員、マイケル・コンウェイ研究補助員、アダム・キャット研究補助員が参加した。会議のシンポジウム5において、「仏典翻訳の過去・現在・未来―『日英基準訳語集』構築に向けて」という総合テーマのもと、仏典翻訳の諸問題を指摘し、議論する七つの発表が行われた。

③6月23日(月)～6月30日(土)　アメリカ合衆国ジョージア州アトランタ市のエモリー大学において開催された第15回国際仏教学会大会（The XVth Congress of the International Association of Buddhist Studies）に箕浦暁雄研究員が参加し、24日に初期仏教のセクションで“Sthiramati and Yaśomitra”という題目で研究発表を行なった。ガンダーラ写本や大乗経典に関する部会などにも参加し、欧米における仏教学研究の動向を探ることが出来た。

④6月20日(金)　13：00～　真宗総合研究所内ミーティングルームにて、9月20日から23日にイタリア、レッチェ市で開催される第12回ヨーロッパ日本研究協会国際会議（The 12th International Conference of the European Association of Japanese Studies）における発表パネルに

関する研究会を開催した。"Where Have All the Pure Lands Gone?: Challenging and Developing Doctrinal Authority in Modern Shin Buddhism"（浄土は何処へいったのか？：近代真宗における教学的権威への挑戦とその発展）というテーマで、三本の研究発表を行う準備として、各発表の進行状況を確認し、発表内容の関連性を高めるための議論を展開した。

⑤7月24日(木) 13：00～ 真宗総合研究所フリースペースにて、第12回ヨーロッパ日本研究協会国際会議におけるパネルに関する研究会を開いた。木越康准教授（特別招聘者）が「『浄土』を解体しようとした男」という題目のもと、野々村直太郎の浄土理解に関する発表を行い、その内容について議論した。

⑥8月18日(月) 13：00～ ローズ教授（研究班チーフ）の個人研究室にて、第12回ヨーロッパ日本研究協会国際会議におけるパネルに関する研究会を開催した。井上尚実研究員が、"The Expulsion of Vulgarity from Religious Discourse: A Ban on *Etoki* and the Establishment of the Modern Pure Land Orthodoxy"（宗教的言説からの通俗性排除：絵解きの禁止と近代浄土教正統信仰の確立）という題目で、学会参加の事前発表を行い、その内容を検討した。

⑦9月1日(月) 13：00～ 真宗総合研究所内ミーティングルームにて、第12回ヨーロッパ日本研究協会国際会議におけるパネルに関する研究会を開いた。マイケル・コンウェイ研究補助員が、"Doctrinal Authority and Innovation: Kaneko Daiei's Transformation from Heretic to Hero"（教学的権威と革新—異安心から偉人へという金子大栄の変遷）というタイトルで、金子大栄の浄土理解とそれが呼び起こした事件に関して発表し、学会部会のテーマとパネル全体のテーマとの関連について討議した。

⑧9月11日(木)～9月14日(日) ロバート・F・ローズ国際仏教研究チーフ、井上尚実研究員、マイケル・コンウェイ研究補助員が学術交流提携校であるハンガリー（ブダペスト）のエトヴェシュ・ロラーンド大学（ELTE）を訪問し、12日にはローズ教授が中国仏教に関する講演を行った。

⑨9月15日(月)～9月19日(金) ローマにて、上記三名は、木越康准教授と合流し、イタリアの大学・研究機関・宗教施設の訪問・視察を行った。

⑩9月20日(土)～9月23日(火) 南イタリアのレッチェ市サレント大学で開催されるヨーロッパ日本研究協会第12回国際会議に参加し、宗教・思想史部会において23日に大谷大学パネルの発表を行った。

〈ドイツ・フランス班〉

①2008年5月1日(木)～5月4日(日)

於 マールブルク大学

第6回ルードルフ・オットー・シンポジウム「信仰の広まりと回心に関する宗教間の相互理解（Interreligiöse Verständigung zu Glaubensverbreitung und Religionswechsel）」に参加し、藤枝真研究員が「浄土仏教と現代のスピリチュアリティの一形態としての念仏（Reines-Land-Buddhismus und 'Nembutsu' als eine gegenwärtige Form inoffizieller Spiritualität）」というタイトルで発表した。発表後、廣川智貴研究員の通訳を交え、念仏の持つ多義性や念仏に関する比較宗教学的研究の可能性などについて、会場の参加者との活発な質疑応答を行った。

〈中国班〉

①大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布教関係部分の資料一覧作成

中国華北関連の綴資料（仮番号26～28）の一覧作成作業を継続中。引き続き，残された資料（中国華中・華南・台湾，朝鮮半島関係）に順次着手する。

②公開研究会の開催

2008年5月14日（水）15：30～17：30

於：真宗総合研究所ミーティングルーム

○中国山西省大同・朔州市区の遼金元石刻
井黒忍・嘱託研究員

○中国山西省晋中地域の仏教遺跡について
桂華淳祥・研究員

○20世紀前半における東部モンゴル地域の仏教事情
木場明志・本学教授

③中国東北師範大学との共同研究「中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」の推進

2008年8月22日(金)～8月27日(水)、浅見直一郎・桂華淳祥研究員、井黒忍嘱託研究員、松川節主事、木場明志本学教授の5名は中国東北師範大学（長春）を訪問。程舒偉・劉景嵐研究員とともに吉林省集安市および通化市（通化師範学院）にて共同調査を実施し、集安市では丸都山城、国内城、将軍墳、好太王碑を始めとする高句麗時代の遺蹟を視察、通化市では通化師範学院高句麗研究

院院長の耿鉄華教授、通化師範学院図書館長の李樂菅教授らと面談し、吉林省東部地域における宗教と文化に関して研究交流を行なった。

西蔵文献研究

《海外出張》

◇2008年6月7日(土)～6月17日(火)

MacOS X用Tibetan Language Kitの開発のため、嘱託研究員・野村正次郎をアメリカ・サンフランシスコに派遣。Apple社主催の「Worldwide Developers Conference (WWDC)：世界開発者会議」に参加。随時関係者との打ち合わせや協議、嘱託研究員・スティーブ・ハートウェルとの開発作業をおこなった。

《研究打ち合わせ》

◇2008年5月15日(木)　12時10分～12時50分

議　題：Otani Unicode Tibetan Language Kitの今後のサポートについて。

場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム

《パネル展》

◇2008年5月26日(月)～6月6日(金)

テーマ：木の葉で物語る：東インドの貝葉文化

東インド・オリッサ州にあるSARASVATI研究所所蔵貝葉写本との共同研究成果報告の一環として、貝葉写本の紹介。

会　場：響流館1Fギャラリー

大谷大学DB研究

事務連絡会議

◇5月15日(木)　13：00～14：30

議　題

デジタル化作業実行へ向けての状況確認

作業分担について

その他

場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム

◇6月12日(木)　13：00～14：30

議　題

作業報告

今後の方針について

その他

場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム

◇7月10日(木)　13：30～14：30

議　題

作業報告

今後の方針について

その他

場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム

真宗本廟（東本願寺）造営史研究

真宗本廟（東本願寺）造営史の全体像把握のための史料翻刻・国内資料調査等、その成果と進捗状況について報告。また、『本願を受け継ぐ人々―真宗本廟（東本願寺）造営史―』の書名及び内容目次を確定。引き続き、公開研究会を実施すると共に、執筆者会議を開催し、造営史の全体像や諸問題点を共有化して、刊行物作成における論点や課題を整理。

《事務連絡会議》

◇5月30日(金)　17：45～18：45

議題：①東本願寺史料調査の経過報告

②本学図書館・博物館所蔵史料調査の実施予定報告

③第1回編集委員会議の議事打合せ

④第2回以降の執筆者会議の開催計画

⑤東京方面調査の調整

⑥史料翻刻の進行状況報告

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

◇7月8日(火)　17：30～19：00

議題：①執筆担当者の変更案について

②今後の執筆者会議の開催計画について

③東京方面調査出張について

④メーリングリストについて

⑤その他

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

◇9月26日(火)　17：50～18：30

議題：①今後の執筆者会議の開催計画

②東京方面調査報告

③福井方面調査計画

④その他

場所：響流館3Fマルチメディア演習室

《全体会議》

第9回公開研究会（第10回全体会議）

◇6月20日(金)　16：45～18：00

議題：①講演会

題目：富山県刀利村からの献木

講師：加藤享子（富山民俗の会）

②連絡事項

場所：響流館3Fマルチメディア演習室

《執筆者会議》

第１回執筆者会議
◇５月30日㈮　16：10～17：40
　議題：①報告会
　　題　目：『御作事日記』に見る元治焼失以後の作事
　　報告者：木場明志（研究員・チーフ）
　　題　目：安政度再建と『御作事日記』
　　報告者：平野寿則（研究員・庶務）
　　②連絡事項
　場所：響流館３Ｆマルチメディア演習室
第２回執筆者会議
◇７月25日㈮　17：30～19：00
　議題：①研究報告会
　　題　目：東本願寺両堂再建と三河門徒
　　―続・『三河大谷派記録』の基礎考察―
　　報告者：安藤　弥（嘱託研究員）
　　②連絡事項
　場所：響流館３Ｆマルチメディア演習室
第３回執筆者会議
◇９月26日㈮　16：10～17：40
　議題：①研究報告会
　　題　目：未定
　　報告者：大谷めぐみ（研究補助員）
　　②連絡事項
　場所：響流館３Ｆマルチメディア演習室

《編集委員会議》
第１回編集委員会議
◇６月20日㈮　6：10～16：40
　内容：①編集方針の確認について
　　②編集の現況と今後の促進手順について
　　③その他
　場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

研　究　所　報　第53号
2008年10月１日　発行
編集発行　大谷大学真宗総合研究所
〒603-8143　京都市北区小山上総町
Tel. 075-411-8498　Fax. 075-411-8435